
Heart Friend

ぐっちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H e a r t F r i e n d

【Nコード】

N 8 7 7 8 C

【作者名】

ぐっちゃん

【あらすじ】

季節は春。南東高校に入学した谷嶋介人は妙に人との交流を拒絶する少年だった。孤独な彼に友達はいない。そんな彼に出会ったある少女は手を差し伸べるが…

第1話

誰とも関わらない。

誰とも一緒に笑わない。

もう誰とも。

そんなつもりだった。

この春までは。

「HR始めるぞー」

ここ、南東第三高校の入学式から一週間が経った。早ければ友達が出来ても不思議ではない。

まだ小さいざわめきの教室に、このクラスの担任が入り渋々と面倒そうに朝のHRを始めた。

「…」

そんな朝、一番後ろの一番左端にいる生徒、谷嶋やしま介人かいとは、名前すら覚えていない担任からの連絡事項も聞かずにお気に入りの小説を読み更けていた。

「谷嶋 あ、聞けー」

担任に気付かれた。端の端だから余計に気付かれやすいのだろう。
(うるさいな：聞くフリでいいか)

そうして顔を上げ目線だけを本に落とす。

「じゃあ、今日の5時限目の美術は2－Bとの合同になるからな。
上級生とトラブルのないように」

昼休み。朝コンビニで買ったオニギリとお茶を持って庭に出る。

(どこもいるな：)

軽く見渡す介人が探しているのはベンチとかの空きではない。
“人が居ない場所”なのだ。

(：あった)

すぐに見つけた木の根元とその周囲には誰も居なかった。が、それが介人にとっては都合がいい。早速座って袋からオニギリを出す。
(まずは焼きタラコから：)

全部食べ終わり、パックのお茶を最後までストローで吸い尽す。
心地よい風がふんわりしていて実にいい気分だ。

(5時限目の美術：二年生と合同だっけか)

「あの：」

(?)

突然の声に介人が静かに顔を上げると、髪の毛の長い女子が購買で買ったパンを入れた袋を片手に彼を見下ろしていた。髪飾りは付けておらず、その茶色がかった髪は背中を埋めるほど長い。

(綺麗な人：学年章は緑、二年生か)

「はい？」 介人は少し遅れてから返事をかえす。

「あ、君一年か」

どうやら女の子の方も相手の学年を伺っていたらしい。

「ここでお昼食べていい？」

「：：：」

いつもの介人なら即座に立ち去るか別な場所に行かせただろう。しかし、断る理由がない上に相手は先輩なのだ。しかも女の子とあっては気を悪くさせるわけにはいかない。

「：いいですよ」

「ありがと」

女の子は左隣に座る。

(あーもう：)

介人にしてみれば“よりによって”だった。肩が触れそうな位の距離に腰を下ろしていたのだ。

介人は気付かれないように少しだけ離れる。

「？」

彼女は何故かその距離を詰めてきた。

「：っ」

介人はまた距離を置く。もちろん彼女は埋めるように近付いてくる。

「なんなんですか」

「なんで離れるの」

「近付いてくるからです。そっちはなんで近付くんですか」

「君が離れるからでしょ。っ—かなんでそんな近付くのを嫌がるの？」

「俺は」

ここで介人は口をつぐんだ。そして曖昧な返答に切り換える。

「：いいでしょう、別に」

「よくないわよ。何かあったの？お姉さんに相談してみ
女の子の声をチャイムが遮った。昼休みしゅーりよー。

「：じゃ、そういうことで」

「あ、待ちなさ：もうっ」

呼び止めの声も聞かず、介人は美術室に向かった。

（：変な人だ。でもあの人ならきつと仲良く：）

介人は思わずクスリと笑うが、すぐに表情を無に戻す。

（なに考えてんだよ。例え仲良くなっても：）

5時限目の美術。今回は“春”をテーマに外でスケッチらしい。

（春：ね。適当に桜でも描くか）

そう思って桜の木に足を向けると、

「あ」

「：あっ」

介人が目を合わせたのは今会うと厄介な人物だった。

「さっきの無愛想君か。C組だったんだね」

「：はい」

「さ、て：さっきの話の続きをしましょうか」

「：授業しましょうよ先輩」

「にへへー大丈夫大丈夫。今回の授業は絵の提出なしだから。一年もそうだよね？」

確かにそうだった。介人も担当の教員がそう言っていたことを思い出し、反論を諦めることにする。

「：」

「で、私を避けた理由は聞かせてもらえないのかな？」
「なるべく」

介人は即答した。その様子には彼女は全く動じず、

「そう。じゃ、おしまい。一緒に絵、描こうか」

逆に介人が驚かされてしまった。もっとしつこく聞いてくるのか
と思っていたのだ。しかし：避けられている相手と“一緒に”なん
て：何を考えているのやら。

「いや、だから：」

「行こっ。桜描くならあっちがいいよ」

彼女は介人の手を取ろうとする。が、

「！」

介人は思いきりその手を弾いた。

「え：？」

これには流石に彼女も啞然としたようだ。

「：すみません」

「あ、気にしないで。別に痛くないし：あ、そだ。君、名前は？」

「谷嶋介人です。：えと」

「風戸由奈かざと ゆな。よろしく」

由奈は改めて手を差し出す。

「：」

だが結局、介人はその授業の最後までその手に触れようとはしなかった。

「あー：」

ため息混じりの声で自分の席につく介人。

（なんであの人と仲良くなってるんだよ：俺）

正直うんざりだった。らしなければよかった。そう後悔していた。
場所は変わり、ここは屋上、それも三年前の。

『おい、反撃しろよ。ほら』

『言ってみろよ。いつもみたいに“いい加減にしろ！”って』

起き上がっては殴られ、また起き上がっては蹴られ：そんな日々
に少年は限界がきていた。

『：たすけて』

近くにいる友人に手を伸ばす。しかしそいつは手を取らない。

『ほれ、させよ』

その友人はバットを受け取る。

『え、なにを：』

『とどめ』

友人は躊躇ったが、それもほんの暫しのこと。震える手でバット
を振り上げた。

『ごめんな』

「！：」

最後のバットが空を切る音で目を覚ます介人。

（寝てた：のか）

時計を見ると、授業が始まる直前だった。

（まだ：忘れられないか）

いつのまにか嫌な汗が全身にベツトリと付いていた。

「席につけー」

教師が来たことなんかどうでもよかった。ただ、今は：

（友達なんか：いらねえ）

歯を悔い縛りたかった。

一方、

「はあ：」

2―Bにもため息を漏らす由奈が。

「由奈ちゃん、どうしたの？」

由奈の友人、真理が話しかけてきた。

「いや、さっきの子なんだけどね」

「惚れたのか？」

と、佐紀。

「違う、違うから。なんかさ、秘密があるんじゃないかと」

「秘密？」

「理由ありみたいというか：あの反応は尋常じゃないもん」

ふと、由奈は介人に手を弾かれた瞬間を思い出す。

「ちよっとショックだったなー：」

机に突っ伏す由奈。その頭を佐紀が撫でて慰める。

「あーよしよし。思えば由奈が人と仲良くなれなかったのって今回で三人目だっけね」

「ね。不良とでも仲良くなれるくらいだもんね」

「にへー、褒められた♪」

ふにやりと顔を緩める。

「でも由奈を拒否る人って気にはなるかな」

「あ、私もー。由奈ちゃんが気になる子だもん」

真理が小さく手を上げる。

（やっぱ：もう少し接してみるかな）

由奈は髪をいじりながら次の授業の準備を始めた。

放課後。

今日の掃除をさっさと終わらせた介人は欠伸をかましながら校門を出ようとした。

「よしす、介人くーん♪」

由奈だった。後で介人が聞いた話によると、掃除をサボってまで早くから校門で待っていたらしい。

「……」

「こら、そんな露骨にやな顔しないの」

介人は無意識の内に眉間にしわを寄せていたらしい。

「ちょーっとお喋りがしたいな、と」

「…ご勝手に」

「にへへー♪」

二人が並んで歩く。これだけの表現では二人は恋人としか思えな
いだろうが、実際はてんで違う。介人と由奈の位置は道の端と端だ
った。その間隔は実に半径1メートル程。赤の他人から見ればなん
と異様な光景か。そんなこともあまり気にせずに由奈は介人に話掛
ける。

「介人君てさ、友達何人いる？」

「いませんよ」

「そっか。じゃあ私が第一号だ」

「は？」

突拍子もないことに介人はつい振り向いてしまった。

「え、なんですか」

「ダメ：かな？」

由奈はちよっただけ首を傾けた。

「んや：その：」

「ダメかな？」

「：：：んと、あー：いや」

「あのね…」

じれったくなったら由奈はいきなり介人に寄って、

「人と話すときは目見なさい、目え」

「ぐっ!？」

ガシッと顔の両頬を掴んで正面を向かせた。

「大体、介人君は：」

「ちょ：やめ」

介人が唸る。しかし由奈が止まるはずもなく、

「態度が無愛想過ぎ。それに私の握手も断ったしさ、そんなに友達
つくりたくないの? そんなんじゃない?」

「：うう：」

うめき声を上げた刹那、介人の視界が歪んできた。そして枯れた
花のようにその場にへたれ込む。

「高校生活が：!!? ちょっ、どうしたの?」

由奈は腰を落として介人の顔を覗き込む。さっきまで到って健康
だった介人の顔は青白く、唇は痙攣し続けている。おまけに額には
異常な量の汗。

「：うゝえゝっ：げほ：」

どうやら吐気もあるようだ。とても只事ではない。

「どうしよ：確か近くに：」

由奈は慌てながらも介人と肩を組んでゆっくり歩き出した。

しばらくして：

(：冷た)

額に何か冷たさを感じて、介人の意識は戻った。手で額を探ると、
濡れハンカチが乗っているようだった。

「よかった：気が付いたんだ」

介人が目を開けた先には由奈の安堵した顔があった。

「：風戸先輩」

空は少し橙色が掛ってきている。気絶してから結構時間が経った

らしい。

「いきなり気絶するからビックリしたよ。気分はどう？」

今いる場所は遊具らしきものが多い。公園なのだろうか。だが、今の介人にはそんなことより先に感じるがあった。

（もしかして先輩が…ここまで運んでくれて、介抱まで？）

「……」

しばらく黙り続ける介人。由奈も介人を黙って見ていた。

（介人君、大丈夫かな？でも一体なんで…）

由奈は今までは逆に少々躊躇いがちに尋ねてみた。

「あの…さ。介人君何かの病気なの？」

「…言わ

「無理して言わなくてもいいよ。でも」

返事をさせないまま、由奈は言葉を続ける。

「もし私のせいでこうなったなら、ちゃんと謝りたいし、出来るだけ分かってあげたいん…だ」

由奈の声はさっきまでの活気がない。それを感じた介人は静かに起き上がる。

「…話しますよ」

「……」

介人が一度話し始めると、あとは話すべきことが次々に口を割って出てきた。

「何年前か前、俺はいじめに遭っていました。それも言葉と暴力の両面から。…その中、とうとう気持ちに限界がきて俺は反撃しました。で、その結果……そいつらの行為が更にエスカレートしてリンチじみたことまで…」

「……」

由奈は最後まで聞こうとじっと待ち続ける。

「俺は近くにいた友達に助けを求めたんですけど」

「……」

「……………」

「：けど？」

「その友達はいつらに命令されて：“俺をバットで殴りました”
拳を握り締めた。」

「え：」

「その時から俺は誰とも関わらないって決めたんです。その友達は
必死に謝ってきたけど、俺は絶対に許しませんでした」

「：：」

「：そして、それから悪夢が始まったんです。あのときの俺は人に
触りたくもなくて、触れば嫌気がさすようになりました。：やがて
俺は人を拒絶しすぎて、遂には」

介人は言葉を途切らせるが、由奈が待っているので続けた。

「他人の肌に触れる度に“吐気”が出るまでの“対人恐怖症”にま
でなりました」

ここで由奈は気付いた。

（倒れたのは、私のせい：？）

「：大丈夫、さっきのことは気にしないでください」

由奈の考えを察した介人がいつもの無愛想な言葉をかける。

「：：うん」

「でも変でしょう？こんな奴。人と握手すらできないなんて：」

「そんなことない！」

由奈が声を張り上げた。その大声に介人の方は驚き固まる。

「しょうがないよ：そんなことがあったんだもん。」

私だってそんな目に遭ったら今の私じゃなかったと思う」

「：：」

「だから、自分が変だなんて言わないの。ね？」

由奈の無理のないこの笑顔を見て、介人は何故か気分がよかった。

（なんでかな：先輩と話すと、あまり気分が落ち込んだりしない。

それどころか：）

「よし！決めた！」

勢いよくベンチから立ち上がる由奈。

「何がですか？」

「対人恐怖症。私が治すの。少しずつ人と接すれば治ると思うから」
「でも」

「もうこうして私と普通に話せるでしょ？だから後は握手の練習っ」
「いや…」

介人の反語も聞かずに由奈は言いたい放題だ。

「私達、もう友達だもんね？」

由奈は手を介人に伸ばす。

（…友達か）

友達。もう二度と使わないつもりという言葉だった。それでも今は、全然嫌な気がしなくて。

（もう一回つくってみるかな…友達）

介人も立ち上がり、由奈の掌に指先をちゃんと触れさせる。不思議と気分は悪くならなかった。この程度の接触なら平気なのか、それとも：

「にへー♪」

この行為が握手ではないものの、由奈はさぞ上機嫌な様子で笑った。

「かざ」

「由・奈」

風戸先輩、と呼ぼうとした介人に自身の名を告げる由奈。

「由奈って呼びなよ」

「え…」

「“友達”なんだからさ」

「…由奈さん」

「うん、よろしい。じゃあ帰ろ、介人♪」

気付けばもう夕方。ほんの少しだけ涼しい時間の中、二人は指だけを触れさせたまま、途中まで一緒に歩いていた。

第1話（後書き）

はじめまして。

初投稿です。今回は個人サイトでファンフィクションを続けながら書いた、完全オリジナルの学園ラブストーリーです。

今作の連載にあたっては「人との心の触れ合いを大事にする」をテーマとしております。

これは何気に自信があったり（笑）こんな小説でも楽しんでくれたら感激です。

では。

第2話

翌日、水曜日。

「：」

自宅の布団で目覚めた介人がのっそりと起き上がる。

（昨日：）

昨日。それは由奈と出会った日。もう一度友達をつくろうと思った日。そして、自分が僅かに変わった日だった。

（風戸由奈さん：か）

あの時触れた指の感覚を思い起こす。触ったそばからじわりじわりと感じてくる温もり。嫌な感じはまるでなかった。

（久しぶりだな：こんな気持ち。………学校行かなきゃ）

「今朝は早いのね」

母親が台所から次々に朝飯を運んでくる。今朝は地味に目玉焼き。

「まあね」

息子の方は醤油をかけながら淡泊な返事を返す。食べている食事はいつも通り地味だが、気分は前よりかなり良い。

「何かいいことあったの？　なんか介人の顔、昔に戻ったみたいじゃない」

「ん…そだね」

「ま、良いことよね。あんた、あれから今まではなんっ…にも喋らなかつたもの」

「ごちそうさま」

うるさいな、と思いつつ箸を置いて鞆を持つ。だが介人は玄関に向かう前に言いたいことがあった。

「母さん」

「ん？」

「昨日友達できた」

「あら、ホント？」

「行ってきます」

嬉しそうに驚いた母親を気にも留めずに介人は家を出た。

「は：あふ」

少し早く学校に着いた介人は欠伸を解放して教室へ直行する。

（？もう誰か来てるな）

教室の引き戸を開けると、自分の席の前にあたる所に女の子がいた。由奈より若干短めの黒髪の最後部分を青いリボンでまとめている。

「おはよ」

「おは：よ」

話しかけてきたことに介人本人は戸惑う。自然に挨拶してきたその子とは一度も話した覚えはない。

（まあ、対人恐怖症治すには逆にいい機会か？）

「どうしたの？」

女の子は動揺した介人を見ている。

「あ、いや：別に」

「今日の数学、英語に変更だったよね：英語持ってきた？」

「え：忘れた」

「私も。英語嫌いなものにな」

何とも優しい声で話す少女。その様子にぎこちなさはない。まるで介人のことを昔から知っているかのように：

（誰だろ？小中学校一緒だった記憶もないけど：）

「聞してる？」

「あ、ごめん：」

「カイ君、昔からぼーっとしすぎだね。変わってない」

「：カイ、くん？」

何故か懐かしいその呼び名。記憶の片隅にありそうな感覚が頭をよぎる。

（：ダメだ。思い出せない。そもそも過去のトラウマが強すぎるし）
そう。あの時のいじめ以来、介人は中学生以前の記憶を忘れかけている。無理もなかった。そうなる程、長い間惨めで痛い思いをしたのだから。

「あの、さ」

「なに？」

「：誰？」

介人は彼女を指差す。はっきり言って無礼で失礼だが、もう単刀直入に尋ねるしかなかった。

「：ああ、そっか」

彼女は今頃気付いたように頷いた。

“よつば幼稚園”卒、加賀^{かが}可菜香^{かなか}「

「かがかなか：」

幼稚園卒：とわざわざ言ったということは幼稚園時代での知り合ということになる。：もちろん思い出せる訳がないが。

「きっと分からないかも。小さかったし、カイ君に会ったのだから：」

可菜香はそこで言葉を詰まらせる。介人も少し気にはなったが、別に深く聞くんもりはなかった。

「そう：か。まあ、よろしくな：加賀」

「うん」

ここで突然教室の引き戸が開いた。入ってきたのは男子だ。

「うーい、朝早いね加賀」

「おはよ、石橋君」

可菜香は石橋と挨拶を交わす。

「石橋^{いしばし}亮君^{りょう}。あたしと家が近所なの」

「つーわけで石橋亮だ。文句ある？」

茶目っ毛たっぷりに人差し指をつきつける。介人は少したじろいだ。

（やっぱりまだ接触は無理か：？）

「あれ、驚かせちゃったか？まあ気にすんな」

石橋は介人の背中をバンバン叩く。只でさえ接近しているのにこう強い接触ではたまったものではない。

（う：やば：吐いてこよ）

「ちょ、ごめ：トイレ行く」

介人は重めの足取りでトイレに向かった。

「おう：大丈夫か？」

「お腹痛いのか？」

二人とも心配してくれた。正直ちょっと嬉しいが、喉の奥から出てくる朝飯を排出するのが先だ。

「平気：うん、多分」

そして二人に背を向けて小走りをした。

「はあ……は：マジ辛いな、やっぱり」

気分は最悪だった。これこそが今までのツケなのかも：そんな気がした。

「：あ」

「はよーす」

息を整え、トイレを出る。少し離れたところで由奈に会った。

「おはようございます、由奈さん」

由奈はまだ登校したばかりなので鞆を手に持っている。まあまあ早い登校だ。

「どうしたの？また気分悪くなった？」

「はい：まあ」

「ね、今日の放課後、あの公園に来られる？」

あの公園。由奈と友達になった場所だ。

「あ、はい。暇なので」

「よし。じゃ、また放課後ね」

そう言って由奈は二年生の教室へ向かっていった。

「朝から元気だな、由奈さんは：」

昼休み。昨日と同じく庭でオニギリを食べた介人は、暇なので図書室に小説を借りに来ていた。

（：お、新しいのがある）

入学一週間で図書の入れ替えがあったらしく、かなり多めに新着図書が陳列されていた。

（何かあるかな：）

お気に入りであるファンタジー小説の棚を歩く。今まで見たことのない小説の数々に介人は目を引かれていた。

（ん、あれ：加賀か）

棚の近くに可菜香を見つけた。椅子にも座らず、床にしゃがんで棚に寄りかかったまま本を読んでいる。

（あれもファンタジー小説か？読み始めたばかりみたいだけど：あ、ちょっとパンツが見えてる）

介人が見ていると、視線に気付いたのか可菜香は慌てて立ち上がった。

「カイ君来てたんだ」

スカートの埃を払い、本を棚に戻す。

「小説探しでな。加賀、何読んでたの？」

「なんでもないよ、只の普通のエッセイだし」

可菜香はまだ慌てている。おかしいのでまさか：と介人は思い、

「ホントに？漫画とか読んでたんじゃ：」

「そんな、違うもんっ。そんなんじゃないんだから」

可菜香は強く否定する。

（うう：アレ読んでて笑ってたなんて恥ずかしくて言えないよ）

心の中で顔から火が出ている可菜香。そんな事実を介人は知るよしもない。

「悪かったよ。まさかと思っただけ」

謝ると可菜香は少し顔を膨らせた。

「もう：カイ君、ちょっと意地悪なところも昔と変わってないよ…」

（昔か：そう言えば俺は加賀を当時は何て呼んでいたんだろう？）

「加賀」

「え？」

「昔の俺はお前をなんて呼んでいた？」

「え：あ、えーと： “カナちゃん” とか」

曖昧な答えをする。介人はその様子がどうも気になってしまった。

「とか？」

「あ、なんでもない。うん、確か “カナちゃん” って呼んでたよ」

“ちゃん” か。なんか今じゃ恥ずかしくて呼び辛いな」

「なんならいいよ、 “ ” でも」

可菜香はぼそぼそと喋る。当然、肝心な部分が聞き取れなかった介人は聞き返した。

「え：とね。あの…」

可菜香は指で袖をいじりだした。

（そんなに恥ずかしい呼び名なのか？）

「あ、あ、あのね：“可菜香” とか呼び捨てでもいいよ：：：って」

「：いきなり心的距離が縮まったな」

「いや、近い間柄なのは元々だから。：でさ」

軽いツツコミの後に可菜香は別な話に切り替えた。

「思い出せた？ 私のこと」

「残念ながら」

「あ：即答？」

昼休みの終わり頃。介人は借りた本を二冊抱えて廊下を歩く。

（可菜香か、仲良くなれそうだな。：あ、気付けば名前に “か” が多い。あと、石橋も結構面白そうな奴だし：）

急激に変化している介人の心。それは自然に “仲良くなれたらいい

い”と思うようになったことだった。

「うおーす」

教室で出くわしたのは石橋だった。

「ん」

「図書室帰りか。おー、二冊も。お前本好きなのな」

「まあな」

「それより：加賀知らないか？」

「可菜香か？あいつならまだ図書室だ」

介人は後ろを指差す。

「そうか。あいつに放課後、生徒会の代理頼みたいんだよ」

「え、石橋って生徒会の人間？」

「んな訳ねーだろ、まだ入学一週間だぞ。二年生に頼まれたんだよ。つーわけで、そんなじゃな」

「ん」

「加賀ー」

「ひゃっ！？…あ、なんだ。石橋君かあ」

「そんなに驚くことはないだろ」

「あは：ごめん」

石橋は目線を可菜香の手元に移す。それは一冊の本。

「…何故にそれを読む？」

「や、あ、これはその」

放課後。掃除や面倒な委員会の集まりを終え、介人は真っ先に公園へダッシュ。そこでは由奈がベンチで座って待っていた。

「おっそーいっ！」

「無茶言わないで下さいよ。新入生は忙しいんですから」

「うおしっ、じゃ、始めよっか」

由奈は待ち合わせに遅刻したことは全く気にしていないようだ。
「そーいや何をつすか？」

「ほら、握手の練習。対人恐怖症治すには、やっぱり人と接しない
とって思うし」

（確かに昨日そんな話をしていたな）

「具体的には？」

「まず、指で触れるのは平気みたいだから、次は軽く掌を触れさせ
ようか」

ベンチから立ち上がった由奈が手を出すと、介人は恐る恐る掌を
触れさせた。握らない握手と言えば変だが、まさにその状態だから
仕方がない。

（由奈さんの手：冷たい）

（介人の手：暖かい）

互いが互いの体温を感じ合う。二人とも暫くそのままだったが、
介人がその沈黙を破った。

「：っ」

「大丈夫？」

足がふらついた介人の背中を支える由奈。

「だから：触ると余計気分が：」

「わ、ごめん！」

由奈は手を放す。すると斜めに傾いた介人の体は自然に：

「あでっ！！」

ドサ、という音でモロに肩を打った。

「あー：ごめんね、マジで」

「：それより、座ってやりましょうか。こう何度もコケたくないで
すし」

「うん、マジごめん：」

苦笑いをしつつ、二人はベンチに座った。

「もう大丈夫です。始めましょう」

「はい、握手」

「も：限界」

介人はベンチに横になっている。その額には由奈の濡れハンカチが張り付いていた。

「吐きそう？」

介人は首を小さく左右に振った。

「今日はおしまいにしよ。また日を改めてやるけど、いい？」

「はい、もちろん」

「ん、いい返事。気分が落ち着いたら帰ろ」

「介人ん家ってどこなの？近い？」

昨日別れた場所の近くに来たところで由奈が尋ねてきた。

「もう少し真っ直ぐ行った駅の近くです。由奈さんは？」

「私？私はちょっと遠いかな。マンションに一人暮らしなんだ」

由奈は介人の家と九十度程別の右前方を指差した。

「え？ご両親は？」

「ああ、自立するのにいいって勧めてくれたの。こっちとしても気が楽だしね」

「ウチは母さんと俺で二人です。父さんは今海外に転勤してて……」

「へー……」

雑談を交している間に、昨日別れた場所に着くと、どちらも“また明日”と告げ帰り路についた。

（介人、掌は五分かそこらが限界ね……。まだまだ先が長いか）

由奈は先程の練習を思い出しながら歩を刻んでいく。

（何かもう少し効率のいいやり方はないかな？できるだけ早く治ってほしいし……）

首を動かしたり背伸びをしながら漠然とした答えでも出そうと躍起になる。

(……………わかんない)

ま、いいか、と由奈は気長にやることを即決。

木曜日の朝七時。可菜香の朝の目覚めは気分が良かった。

「んー：」

心地よい陽射しに、雲雀の鳴き声、すっきりなくなった眠気。朝が気持ちいいとはこういうことなのだと実感できる。

(幼稚園以来だったな、カイ君。性格だけは昔のままだ)

嬉しそうに微笑みながら制服に着替える。介人に会えた事に心底懐かしさと喜びを感じているのだ。：あ、なんだかほわーっと自分の世界に入っている。

(でもなんか雰囲気だけは違う。なんだか暗くなったような…?)

「可菜香ー、朝食要らないのか? もう遅刻するぞ」

一階から父親の声がする。随分せっかちな喋り方だった。

(大丈夫、大丈夫。今朝は早く起きたし、まだ七時：あれ?)

彼女が携帯電話を開くと、数字は“八時三十分”を告げていた。

只今の時刻では、彼女の家から学校はここからギリギリの距離。

「：あああっ!」

髪もぐしゃぐしゃのまま、急いで階段を駆け：じゃなくてズダンズダン、と飛ぶように下りる。

「こら、可菜香。床が抜けるだろ」

父親は朝食をちまちま食べながらのんびりしていた。会社はすぐ近くからだ。

「朝ごはんいらないから! ごめん、お父さん!」

洗面所で軽く髪型を整え、鞆をひっ掴んで玄関に駆け込んだ。

「行ってきまーす!」

「という訳でギリギリだったのー」

まだ息の整わない可菜香は鞆を枕に机に体を寝かせていた。

「まーったく、お前は一日一ドジやらなきゃ生きていけないのかよ
…加賀」

（：そんなにドジなんだ）

石橋は朝早くから余裕の登校。介人は可菜香到着の十分前には来ていた。

「ドジじゃないよ：今回はただの不注意だし」

「いっつもそればっかだな」

「うー」

恥ずかしさから鞆に顔を埋めてしまった。

「石橋と可菜香っていつからの友達付き合いなんだ？」

介人は二人があまりにも仲がいいので聞いてみたくなった。可菜香は顔を上げて思い出そうとしている。

「石橋君、いつから：だっけ？」

「さあ：忘れちゃった」

「……」

：場がシラケた。

「あー：ほら、あれだ。忘れるくらい長い付き合いってことだ。気にすんな」

「うわ、素で忘れてる」

「るせーな」

「席つけー、HRすんぞー」

担任が入ってきた。朝からまた面倒臭そうな声である。

「：石橋」

介人はついでもう一つ気になったことを尋ねることに。

「どした、介人」

「あのオッサン（担任）の名前ってなんだっけ？」

「……お前も何気にヒドイよな」

あつという間に放課後。

介人は今日のコミュニケーションの練習について由奈のクラスに聞きに行ったものの、友人が言うには本人は委員会の集まりがある、だそうだ。

「そうですか。分かりました」

介人が踵を返す。と、話していた由奈の友人が引き留めてきた。

「ちょい待ち。由奈っちから伝言預かってんの」

その内容が書かれているであろう二つ折りの紙をヒラヒラさせ、介人の手に置く。

「じゃ」

「あ、はい」

その人と別れ、介人は歩きながら紙を広げた。そこには数桁の番号と英文字が並んでいて、上には“私のケータイの番号とアドレス”と、その最後部分に元気な顔文字が綴られていた。

(…………え)

「：マジか」

「！！」

すぐ後ろから聞こえた声にビビり振り向くと、二人の二年生が介人の肩越しに伝言の内容を覗き見していた。

「何してるんすか！」

恐怖混じりにサツと距離を取り、紙をズボンのポケットに突っ込む。

「まさか由奈がこんなに早く行動に出るとはね。ねえ、真理？」

「でも佐紀ちゃん、由奈ちゃんは元々積極的だし、年下好きだから
：」

驚いた介人を無視して会話しているのは真理と佐紀だった。

「：あの」

「ああ、ごめんごめん無視しちゃって。私、由奈の友達の二宮^{にのみや}佐紀^{さき}」

見た目活発なショートカットの人が勝手に自己紹介した。

「同じく塚原真理つかはら まりです。もしかして、君が谷嶋君？」

続いて軽くウェーブの掛ったセミロングの人が礼儀正しく頭を下げる。

「：はい」

（：顔は中の下、スタイルは上々、背は由奈よりちょい下、先輩への言葉遣いは概ね良し：か）

佐紀は介人を品定めするようにじっくり分析していたが、介人本人にはそんなことは分からない。

「：まあ合格」

佐紀は親指をぐっ、と上に立てる。

「え？」

「うん、お似合い♪」

真理も軽く拍手した。

「：いやいや！由奈さんとはそんな関係じゃないですよ！？」

いくら介人でもどっかのゲームの主人公ほど鈍くはない。恋愛関係を否定するが佐紀は頷いていた。

「分かってる。だからやっしーが由奈と釣り合うか分析した。特に問題はない」

“ やっしー ” とは介人のことだ。

「あの、塚原先輩。二宮先輩は何か勘違いを…」

介人が佐紀を指差しながら真理に頼む。

「頑張れ、やっしー♪」

「……は、は」

もう引きつった笑顔しかできなかった。

（：とんだ勘違いだったの）

散々勘違いで激励されてしまったあの場をようやく切り抜け、教室に戻る。そこでは石橋がギロリと介人を睨んでいた。

「石橋：？まだ帰ってなかったのか」

「介人お、お前はなんて羨ましいんだ！」

「うお！」

介人は肩を掴もうとした石橋の手を素早く避け、どうしたのか尋ねた。

「どうしただと？お前こそ、そんなにモテるなんてどうしちまったんだよ！？」

「は？モテるって何を…」

「二年の女子二人と話していただろうが。しかも別な女の番号まで貰って」

（情報早っ：）

「で、誰だよ番号貰ったのは？」

「ああ、二年の風戸由奈さんだ」

名前を言った途端、石橋の訳の分からない妬みが止まった。

「：風戸って、あの風戸由奈か？」

「は？」

「あの風戸由奈かって聞いてんだよ」

「：はあ？」

「なんっにも知らねえのか。仕方ねーな、教えっから」

介人は近くの椅子に腰掛け、石橋の話を聞く体勢になった。

「小学校時代、風戸由奈は只の“友達百人できるかな”っていう女の子だったんだ。でもな、三年生の頃、いじめられてるクラスメイトを助けに行ったとき…」

「……」

「そいつらにビンタ一発ずつ喰らわして、夜になるまで説教し続けたんだ。当然その間にいじめっ子どもは抵抗や反論で手を上げるわけだが、その度にビンタをかましたらしい」

「ええー…」

とてもにわかには信じられない話。

（ビンタで大人しく引き下がるか、普通…？）

「石橋：一応聞くが、いじめっ子は男か？」

「いや、全員女だ、いじめられた奴もな。でも人数が問題なんだ。
：なんと五、六人」

「：：：はあ？」

介人は今日何度目にもなる“はあ？”を口から出す。

（相手が五、六人：：一人だけで女の子相手ならできそうだと思っ
たけど：前言撤回。つーかりンチじゃん、それ）

「：：んで結局、いじめっ子の根負けで全員大人しくなっただけ。強引
に仲直りさせたんだ」

「うわ：それ本当の解決になってない」

「いや、話はこれで終わりじゃないんだ。その後、風戸由奈は事件
に関わった全員にビンタしたことも丁寧に謝ったんだよ」

「へえー」

「でな、みんなその恐怖やら姐御気質やら何かに心打たれちゃって
：」

「：：で？」

「全員と友達になった」

（：：：）

介人は石橋の話の全て頭の中で描写する。ビンタをして、説教し
て、謝って：友達になる。

「：普通じゃ有り得ん」

「噂じゃヤクザにも友達がいるらしい」

再びイメージする。

「：：今話を聞くとホントにいそうだから怖いな」

「ま、とにかく俺が言いたいのは、あの女は凄いてことだ」

石橋は立ち上がって鞆を持つ。

「あとお前が女の子ばかりと仲良しだから憎くてな：：。それで、
誰を狙ってたんだ？」

「別に狙ってる訳じゃ：」

「はいはい、贅沢なアホですねー」

石橋はひらひらと後ろ向きに手を振り、そのまま教室から撤退した。

（狙うって：まあ確かに女の子ばかりと仲良くなっているけど）
風戸由奈、加賀可菜香、二宮佐紀、塚原真理…。

（まあ、最後の二人は勘違いで恋愛の応援側だから関係は発展しないとして）

ここで突然誰かに肩をつつかれる。やはり指先で触れる程度の接触なら許容範囲内のようらしく、気分は悪くならなかった。

「まだ居たんだ。帰らないの？」

振り向くと可菜香が立っていた。介人が取り出した携帯電話のデジタル時計は四時半を告げている。

「：あ、四時半か。可菜香はなんでこの時間まで？」

「図書委員。一回目の集まりだからまだ役割の説明だけだけど、少し長引いちゃって」

「図書委員：だったっけ？」

クラスで役割を決めたのは覚えているが、その時介人は全く話を聞いていなかったので、自分の委員会すら記憶保存していない。

（：後で誰かに聞こう）

夜十時。風呂も食事も、及び明日の準備も、本日介人がやるべきことは全て終わっていた。当然部屋で寝転がっている。

「：暇」

本来なら暇でも何の不自由もないのだが、この三日間で色々ありすぎて暇なのが嫌になったのだ。

（図書室から借りた本は何故か読む気がしないし、ゲームも新しいのは買っていない。：しかも寝ようにも眠くない）

体を横に向けるとハンガーに掛けた制服が視界に入った。

（：あ）

思い付いたようにズボンのポケットを漁ると、少しくしゃくしゃ

になった紙に触れた。

(…)

由奈の番号とアドレス。暇潰しという理由では失礼だが、貰っておいて一度も電話やメールなしでは余計にそうだろうと思い、携帯電話を手取る。

(メールにしよう…)

介人は電話が苦手だ。以前は人と話すこと自体が嫌いだったのだから。

(文：か)

まずは挨拶だけでいいか、と携帯電話のボタンを押していく。

“こんばんは、介人です。番号貰いましたので俺の方も。0XX
—X5XX—82XX”

他に言い方が思い付かないのでこれで送信する。

「……………来た」

約十分後。メール用とは違う着信音が奏でられた。開けてみると、通話用の着信で“由奈の”電話番号が表示されている。

(……………初対面の時といい、なんであの人は俺の苦手なことを狙いますましたようにやってくるんだ?)

微妙にイラッとしながら通話ボタンを押した。

「もしもし」

『よーす。元気?』

由奈の普段と変わらない声がスピーカーから伝わってきた。

「普通、メールはメールで返しませんか?」

『え?だっていちいち文を打つより早いでしょ?』

(そうけど…)

この人に反論は無駄と考えた。

『介人、友達できた?佐紀と真理は聞いているけど』

(二宮先輩達、もう俺と友達になったつもりでいるのか)

介人には幸いにも昨日で二人できていた。同じクラスの加賀可菜

香と、石橋亮だ。

「はい、同じクラスに二人」

『おー、感心感心♪このまま百人目指そう!』

「え、それはちょっと」

『卒業までには学校中のみんなをー!』

話をガンガン進めていく由奈。

「：電話切りますよ?」

『えっ、ああ、ごめんごめん』

介人が真剣な声で冗談を言ったら、相手は本気にしてくれたらしく、電話の向こうで慌てていた。

『それで、何か用事?』

「いえ、特にないですけど…」

『じゃあもうちょっと話してようよ。こっち暇だし』

「あー：はい」

この日は遅くまで話し込んでいたが、意外と話には困らなかった。何故なら殆んどが由奈から話題を持ってきてくれたからだ。

(ホントにこの人は、いつもお節介で、細かいことを気にしなくて、明るくて：)

弾む会話で顔が自然と緩む。思えば由奈のお陰で入学前より遥かに他人とのコミュニケーションが取れるようになったという実感がある。それもたった三日間で。

「：ありがとうございます」

携帯電話を口から離して呟いた。

『ん?今なんて?』

「いえ、由奈さんは凄いなー、と」

『にへー♪何だか分からないけどありがとー』

友達といると、何か充実した感覚が湧いてくる。

介人は小学校以来のそんな毎日を取り戻しつつあった。

第2話（後書き）

第1話は全体的に暗かったので、今回は楽しい感じに仕上げました。今回の二日間で新しい友人が四人も登場しています。

介人の昔を知っている加賀可葉香、その友人の石橋亮、由奈の友人で第1話にも登場した二宮佐紀と塚原真理。

話の展開が早いようにも感じられますが、これは入学して一週間から始まっているので、一気に友達が増えることにそれほどの不自然さを感じて欲しくありません（笑）

ちなみに1話の約2倍の文字数を載せようとしたので疲れました（苦笑）

第3話

金曜日。

「んあー…」

朝が苦手な由奈の起床。のろのろと起き出して、ゆっくり着替えてからリビングへ行く。

（今日はー…トースト）

テーブルの上の袋入りの食パンを二枚ひっ掴み、トースターへ。
（いーちごージャムっと…）

ようやく目が覚めてきた由奈は冷蔵庫内を探り、残り半分のジャム瓶を手取る。テーブルに着きながらリモコンでテレビの電源をONにしたら、丁度ニュースの始まる瞬間だった。

『先月発生した、不審者にナイフを突きつけられた通り魔事件の続報です。先日深夜、舞津駅付近で…』

見慣れたベテランのニュースキャスターが嚙まずに機械的に喋る。
（まだ捕まってないんだ。最近の警察はだらしないなー）

ポットからインスタントコーヒーにお湯を注ぎ、パンの焼き上がりを待つ。

『…のため、付近の住民に警戒を呼び掛けている。…続いて、タレントの井原隆司さんと歌手のMEYさんの結婚報告の記者会見です』

記者会見のVTRが流れてる最中にチン、とトースターが鳴って食パンが熱々こんがりの茶色になったことを知らせた。

（へー、あの人結婚すんの。でも長くもって半年かな）

そんな適当な予測をたてながら皿に置いたトーストに薄くジャムを塗り、かじる。

（介人の友達、どんな人だろ？男女一人ずつって聞いたけど。…昼休みにクラスにお邪魔しよっかな？）

『…ので、幸せです』とのコメントを頂きました。…住宅二件が全

焼、原因は新製品のコンロです。えー、火災現場跡地の原田アナウンサーと中継が繋がっております。原田さん？』

（今日は委員会の集まりはないし：三、四時限目に調理実習があるぐらい：）

ニュースを聞きながらトーストとコーヒーを胃に送り、今日の予定や都合を考える。それが由奈の朝の日課だった。

『七時四十分！七時四十分！』

食べ終わった頃、画面右上でこの局のマスコットキャラが時間を視聴者に通達した。

（行く準備しなきゃ）

残り四分の一になったジャムトーストを口に突っ込み、支度に取り掛かった。

（忘れ物は：ないね）

全ての準備を終え、教科書の種類と時間割りを確認する。

「んー：つくはぁ。今日も張りきっていきますかぁ」

思いきり背伸びをして調子を整えてから玄関を出た。

昼休み。介人は眠くて半分落ちた瞼を擦る。

（終わったー：。世界史ってやっぱり眠い。名前カタカナばかりだし、ルターとルソーどっちがどっちか分からないし）

介人はコンビニで購入済みのパンのレジ袋をひっ提げて庭へ足を運ぼうとした。

「介人、一緒に食おうぜ」

石橋も買い弁だったらしく、スパゲティの器を机に出していた。

「上野、ちょっと席借りるぞ」

「おう」

石橋が自分の後ろの席の男子に許可を得て、介人にそこに座ることを勧めてきた。

「あ：サンキュ」

「よしす、介人いるー？」

座った直後、後ろの戸の前で、由奈がナプキンに包まれた弁当箱を肩の位置でぶらぶら揺らしていた。

「こんちわっす」

「お、聞いた。お邪魔するよ。ね、ちょっと席貸してもらえる？」

由奈が石橋の左隣の席の女子に頼んで席を譲ってもらった。

「へー、この人が介人の友達？」

由奈は石橋を珍しそうに見る。

「石橋亮っていうんです」

「亮君か、よろしくね」

「ああ、はい、よろしく。……おい介人、この人……」

石橋は怯え混じりに“まさか”と言った。

「ああ、風戸由奈さん」

「あのビンタ女？」

「？」

由奈は何のことか分からずにいた。

「由奈さん、あの……」

介人が石橋の話したあのやや長い話を繰り返す。由奈はおかずを摘みながら聞いていた。

「何の話、それ？」

弁当を空にし、話を聞き終えた由奈は全く訳が分かんたとばかりに顔をしかめる。

「え、風戸先輩じゃないんすか？」

石橋も似たような感情が顔に出ていた。

「覚えがないし、今時は暴力じゃ解決しないよ。まあ私なら説教はするけど」

「石橋：それどこの小学校の話だ？」

「確か市立浜岡小の生徒から聞いたん：だったと思う」

「私は山野小出身だよ」

浜岡小はこの高校からは西の方だ。介人はその隣街の小学校に通

っていたから分かる。一方、山野小は真逆の東と昨夜の電話で由奈から聞いた。

「全然違うじゃん、別人だろ」

「あれ…？ウチの姉ちゃんから聞いたんだけど…」

石橋に姉がいたことは初耳だった。

「介人、もう一人の友達は？」

だが由奈が別の話に変えたので詳細は聞けなかった。

「加賀可菜香っていう女の子です。今は…会議室に行っていないですけど」

可菜香は図書委員会の役割決めに行っている。

「どんな娘？」

「石橋がよく知ってますよ。近所ですし」

「あいつつか…いわゆるドジっ娘っすよ。小さい頃からよく転び、よく追われる」

よく学び、よく遊ぶの間違いではないかと思える紹介をする石橋。

「追われる？」

「何にだ？」

介人も由奈もこの単語が気になった。

「犬、猫、鳥、虫、魚、そして人に」

動物の主な分類を上げていく。

「生物全てに…」

「ドジというより…可哀想かも」

引きつつも同情してしまう二人。

「ま、そんなですがあいつも人間な訳で、成長した今では結構ドジらなくなりましたよ…前よりは」

石橋はスパゲティの最後の一口をすすった。

「介人、今日はアレやるから、放課後集合ね」

由奈が弁当箱の蓋を閉めながら言った。

「あ、はい」

「そんじゃ」

ナプキンで弁当箱を包んだ由奈が気分よさげに教室を去っていく。石橋は完全にいなくなった頃合いをみて介人に話しかけてきた。

「アレってなんだよ。エロいことか？」

「違うに決まってるんだろ」

放課後。帰ろうとした介人は佐紀に呼び止められた。

「おーい、やっしー」

「二宮先輩、何か用ですか？」

「いやいや、大した用でもないが重要なことだ。まあ耳かっぽじって聞き流せ」

佐紀の言っていることは矛盾だらけだ。言わんとしてることは分かるが。

「何でしょう？」

由奈のところへは急がなくてもいいので、聞くことにした。

「昨日確かめるの忘れたんだけど、やっしーは由奈のこと、好きか？」

「：：あー、まあ、由奈さん美人ですよ。：じゃ」

介人は当たり障りのない答えでひらりとかわす。

「ちょー待て待て。照れることはないって。好きなんだろ、ん？」

佐紀に背中をどつかれた。

「まだそんな関係じゃないですよ」

「まだ？てことはいずれ？」

「知りません。さよなら」

介人はからかい腰の佐紀がウザったくてこの場から逃げ出した。階段を下りる足音が校舎に流れる。

（：ま、あの二人なら何もしなくてもくつつくかもね）

一人にされた佐紀も帰ることにした。

夕方の公園内。既に二人の握手練習は始まっていた。

「…う」

介人の頭がふらつき、ベンチにもたれかかった。由奈は手を放して携帯電話の時計表示を見る。

「おー凄いね。今のは二十分ももったよ」

「そ…すか」

気分は苦しいが、記録を更新したような達成感があった。

「どうしたの？今日は調子いいみたいだけど」

「…多分、色々な人と知り合ったお陰かも知れません」

介人にはこの一週間で五人も一気に友人ができたし、その人達ともなるべく毎日話して仲良くなろうとしていた。それが結果として表れていたのだ。

「一番初めは私だもんね♪」

由奈は自慢気に頬をほころばせた。

「んじゃま、握手は十分だとして…次は」

言いかけて由奈は顔を赤らめる。

「…どうしたんですか？」

介人はベンチに寝そべったまま聞いた。

「…ね、この次の段階って何すればいいんだろね？」

そう聞かれた介人は握手以上のスキップを脳内検索する。

「ん…肩や背中を付けるとか…ですか？じゃなけりゃ、もっと他の人と知り合うとか」

「あ、そか。…だよね、それがある…よね。あはは…」

由奈は微妙な笑い方をする。

（“抱き合う”ってこと考えていた私ってホント馬鹿だ…）
彼女は内ではこんなことを思っていたのだ。

「うん、まあ、これから徐々に時間増やすようにするとして、後は自分で頑張ってみてよ。ね？」

「由奈さん、誤魔化してませんか？何かを」

「何を言ってるの。ハイ、今日はこれで終わり！」

手を鳴らして手早く帰り支度をする由奈。介人はそんな様子がない思議で仕方がなかった。

「? : はい、お疲れ様でした」

「: あの、カイ : 君?」

「あれ、可菜香?」

起き上がった介人の名前を呼んだのは可菜香だった。彼女は公園の入口から歩いてきている。

「介人、可菜香ちゃん、てもう一人の :」

由奈が昼の話で聞いた名前のことを尋ねた。

「はい、そうです。加賀可菜香。可菜香、この人は二年の風戸由奈さん」

「初めまして」

「よろしく」

可菜香が軽く頭を下げた。由奈は少し手を上げて返事とする。

「: ほー、こりやまた可愛い娘と仲良くなったね」

由奈が横目で介人を見て言った。

「偶然ですよ、偶然。それに向こうは俺のこと昔から知ってますし : で、可菜香はどうしてここに?」

からかわれるのは佐紀だけで十分だと言いたげに話をそらす。

「帰りが少し遅くて、カイ君いないから石橋君に電話で聞いて、したら多分ここだって」

可菜香はジェスチャーを混ぜながら話した。

「それでわざわざ俺に? 何か用事あんの?」

「べ : 別に、用事ってほどじゃ : ただ、あの :」

「?」

介人が躊躇いがちに何かを言おうとしている可菜香を待っている。

「あー、ちょい来なさい、介人」

由奈が手招きしたので一旦そちらへ。由奈は声をひそめて話し始めた。

「あのさ、分かんない? 可菜香ちゃん、介人と一緒に帰りたいんだ

よ。だからわざわざ場所まで聞いて来てくれたんじゃない」

「え：まさかそんなあ：」

「絶対そうだよ。とにかく介人から誘いな。一緒に帰るかって」

「ちょ、ちょっ、由奈さん？」

そして介人の背中を強引に押して可菜香の前に出させる。

（何なんだよ、由奈さんは）

介人は心の中で溜め息をつく。

「話：終わった？」

「終わった。：可菜香、せっかくだから一緒に帰るか？」

「！」

可菜香はとっさに頷く。

「じゃあ由奈さん、また月曜日に学校で」

「うん、じゃねー」

由奈は気を利かせて二人を先に帰らせた。介人も薄々そう感じたが、深く考えないことにする。

「いい人そうだね。風戸先輩（というか、すごくいい人だ〜♪）」

「

由奈の意図に気付いた可菜香は由奈に感謝の意を捧げた。

「家ってこの辺なのか？」

「ううん。ちょっと遠い」

歩きながら介人が尋ねると、可菜香はやや右の空を指差す。

「あっちに何軒かゲーセンがあるでしょ？そこからデパートの方に向かってしばらく歩くと家なんだ。今はお父さんと二人暮らし」

「ふーん」

介人はとりあえず道順だけ覚えておくことにする。

「それにしても驚いたよ。入学したらクラスにカイ君がいるんだもん」

「よく俺の名前覚えてたな。普通覚えてないだろ、顔だって全然変わってんのに」

「小さい頃、結構カイ君との思い出があったからね。楽しかったから、名前も覚えていたんだよ。：でも、カイ君雰囲気変わったよね」「雰囲気？」

介人は少しでも可菜香の声に元気がなくなったような気がした。「気のせいだったらごめんね。カイ君、幼稚園の頃はいつも元気に遊んでいたけど、今はなんだか少し暗いような、冷たい感じになったな：って」

可菜香の話し方に遠慮が見てとれる。

（：それは多分、あの時のいじめが原因：だと思う）

介人は昔の自分の性格なんて覚えていなかった。もちろんあの日以来、殆んど忘れてしまったから。

「十年経てば人の性格くらい変わるさ」

「そう？」

可菜香は納得したくない様子。

「：色々あったんだよ、俺も」

「え？」

介人の呟きは可菜香の耳に届かなかった。

「何でもない」

「：うん」

それから二人ともしばらく黙る。その沈黙は一時的な別れで破られた。

「じゃ、私はこっちだから」

「わかった」

誰もがやるように『また月曜に』と別れようとした。

「：あ、可菜香、ちょっと待って」

「ん？」

介人が呼び止め、ブレザーのポケットから携帯電話を出す。

「今日みたいに、わざわざ俺を探すの大変だろ。番号とアドレス、教えるから」

「え：いいの？」

「嫌か？」

この問いに可菜香は急いで首を横に振る。

「そんなことないよ…あ、石橋君のも教えておくね」

「おう」

可菜香は嬉しそうに携帯電話を出して、二人は互いの番号とアドレスを交換しあった。

「：よし、終わり。また月曜にな」

「うん、バイバイ」

二人はどこにでもある、またいつでも会える別れをした。

（やっぱり、いいなあ…カイ君）

そのありきたりな日常の中で、可菜香の心には自然と温かいものが湧いてきたのだった。

夜七時頃、石橋家。

「姉ちゃん」

石橋がソファ―に座っている姉に話し掛ける。

「どうしたの、亮？」

「いい加減嘘つくのは止めてくれよ。また姉ちゃんが昔話した嘘話をしちまったんだからな」

石橋：亮が飛ばす文句に反論を出さず、姉はくすくす笑ってこう言った。

「亮、石橋^{いしばしあや}亜矢も嘘だつてつくわよ。人間だもの」

「いや、姉ちゃんはやりすぎなんだつて。軽くならともかく、姉ちゃんの話は九割が嘘だしさ…」

これまでにした話はほぼ全てが嘘。しかも、それが嘘に聞こえたり聞こえなかったりするものだから弟はつい信じてしまうのだ。

「亮はそれだけ純粋ということじゃない？素敵だと思うわよ、そこまで人を信じることができるのは」

微笑みを崩さずに亜矢は我が弟の長所を語る。

「その純粹さを利用してゐるのは誰だよ！」

「細かいこと気にしない気にしない。あ、そうそう。今夜はお父さん、焼肉にするって言ってたわよ」

亜矢はわざとらしい言い方をする。

「話題そらすなよ！つか言ってるそばから嘘つくな」

「いらなの？久々の高級和牛よ。お父さんの機嫌がいいときしか食べられないんだから」

「いちいち騙されたくねーよ」

「そう：」

それだけ言うと、亜矢は家の電話でどこかにかけた。

「：あ、お父さん。今夜の夕食なんだけど：うん、亮はいらないって。：え？わかんない、なんか最近お肉が好きになれないとか言ってる」

「言ってねえよ！」

亮は受話器を亜矢から取り上げ、すぐさま訂正する。

「もしもし親父？今の嘘だから信じるなよ：え、俺？肉好きに決まってるんだろ！」

ガチャン！と受話器を置いて姉を見る。

「：ぷふっ」

口を押さえて笑いを堪えていた。

「今の何？『肉好きに決まってるんだろ』って：」

「く：（たまに本当のことを言うのがタチ悪いんだよな）」

羞恥心を募らせて赤くなる亮。

「真顔で肉好きをアピールする亮：面白い」

「黙れブス」

笑っている姉に精一杯の反撃をする弟。

「それはそうと、学校はどう？楽しめてる？」

亜矢が悪口を無視して尋ねた。

「まあまあ。ただ、友達に一人だけ違和感がある奴がいるかな」
「違和感？」

「何か話してても、よそよそしいっつか…人と話すのが苦手っぽい奴だった」

「…なんて名前？」

「谷嶋介人」

「ふーん」

亜矢は興味がありそうな返事をする。

「亮、後で紹介して」

「…姉ちゃん、まだ“理想の彼氏探し”諦めてないのか？」

ちなみに亜矢はこの辺りにある大学の一年だ。ルックスも中々良いのに、未だに彼氏はいない。その理由は…

「だって、私に告ってきたどの男もなんとなくダメなんだもの」

“なんとなく”だけで男を判定してきたから。で、その結果がこれなのだ。

「贅沢なんだよ、姉ちゃんは」

呆れ顔の亮が言った。

「そうかしら？…とにかく、家に呼びなさい。出来れば明日か明後日ね」

ソファーに寝そべり、話は終わりよ、と手を振った。

「まったく…呼ぶにしてもあいつの番号知らな」

ここで亮の携帯電話が鳴ってメールの着信を伝えた。

「…メール？加賀から……………うわ」

思わず引いた亮に送られてきたのは介人の番号とアドレスだった。

「何て都合の…悪いものを」

「亮？何変な顔してるの？」

亜矢がソファーから立って亮の携帯電話を覗いた。

「…あいつの番号がきた」

「ちようどいいじゃない。明日呼びましようよ」

「…はいはい」

亮は洩々介人にメールを送った。

介人と亮の休日はどうなるやら。

第3話（後書き）

第3話：ここでまた新キャラです。

石橋亮の姉、亜矢が出ました。簡単に言えば嘘が大好きな大学生です。

さて、この話は可菜香と亮が由奈と初めて会う場面がありますが、由奈は数分で仲良くなってます。

こんな人なら、いわゆる『友達100人』も実現できたりして：

さあ、介人は由奈ともますます仲良くなって、由奈本人は可菜香の恋を応援することになりました。介人自身も段々と対人恐怖症を克服する兆しが見えそうなの：

次は休日の話です。

第4話

土曜日。

「佐紀ー、起きなさい。今日は早く家出るんでしょ？」

母が佐紀の体を揺らす。だが佐紀は起きる気配がない。

「うにゃー、今日はいいい、寝るー」

「彼氏待たせてるんでしょ？早くしないとフラれるよ」

「ん…わかった、わかったってばー…」

のっそりと起き出し、ボサボサの髪を搔く。

「全く…あの子も大変ね。だらしない彼女を持って」

「るさいなー。外ではちゃんとしてるからいいの。それに誠は私に
ラブラブだから気にしなーいもーん♪」

「はいはい」

母は苦笑するしかなかった。

「……」

話は変わるが、介人は昼過ぎから亮に呼ばれて石橋家の門前にいる。

（あのメールの内容、何なんだ？）

チャイムを鳴らそうかと迷いながら昨夜の亮からのメールを思い出す。

『悪いが明日、家に来てくれ。ケーキ屋花菱の向かい側』

（訳がわからないって）

介人はチャイムを押そうと人差し指を伸ばした。

（…人の家に入るのも何年ぶりかな）

チャイムを押したらキンコン、と音が鳴った。少し待つと玄関のドアが開き、家から亮が出てくる。

「来たか。悪いな、休みにわざわざ」

「一体何の用事？」

「まあ、ちょっとウチの姉ちゃんが…な」

門の鍵を開けながら、亮は溜め息を漏らした。

「（言えるわけないだろ。姉ちゃんが彼氏になるか品定めをするために呼んだって）ま、上がれや」

「お邪魔します」

玄関から靴を脱いで上がる。いつもと違い、友達の家というものはやはり新鮮な気持ちになった。

介人は亮についていくままに階段を上がり、上がってすぐ右にある部屋に入る。

「この部屋でちょっと待っていてくれ」

「ん」

亮は部屋を出ていった。介人が部屋の中を見ると、違和感に襲われた。

（…?）

明らかに女っぽい趣味のインテリアが並んでいた。女の子…って感じではなく、大人の女の趣味に近い。

「すまん、待たせた」

亮が部屋に戻ってきた。そして介人は一番に尋ねる。

「石橋、お前こんな趣味…」

「は? : ああ、違う違う、ここ姉ちゃんの部屋」

「…だよな」

本気で言うわけがない。

「: 君が谷嶋介人？」

亮の後ろから女の人が出てくる。

「え : もしかして、石橋のお姉さん、ですか？」

「そ。私、亜矢。よろしく」

「は、はい」

介人がおずおずと手を出す。亜矢はそれを待ってましたと言わん

ばかりに掴んできた。

「……」

介人にとって、由奈以外の人との握手は久しぶりだった。これも他人に馴れるためのことだと思って、少し苦しいのも我慢する。

だが。

「っ：！？」

亜矢が手を思いきり締め付けてきた。意外に痛いので振り払おうとしたが、亜矢は放そうとしない。

「あだだだっ！！」

「ちよっ、姉ちゃん！」

亮が亜矢の頭をはたく。するとフツと手の力が抜け、介人は痛みから解放された。

（：ってえ：万力で挟まれたくらい痛い……）

一体どうやったらあんな馬鹿力が出るのか。

「何やってんだよ初対面の奴に！」

「ああ、ごめんね。あまりにもムカつく男だから
笑顔で言う。」

「……え」

「嘘だろ？」

「うん♪」

亮が呆れた顔で聞くと、亜矢は頷いた。

「悪いな。姉ちゃんってこういう人だから」

「そ。こーゆー人」

「はあ、なるほど」

いまいち納得のいかない介人だったが、とりあえず頷いておけばシメられないと思った。

「：うん、顔は悪くもなく。今のでも怒らないし」

介人の周りを歩きながらじろじろ眺める。

（二宮先輩みたいなことしてる……）

「でもダメね。なんとなく、ね」

「介人でもダメか：姉ちゃんが興味持ったからいけるかと思ったけどな」

「百聞は一見にしかず、よ。亮から聞いたのはどんな感じかってことだけ」

「あ、あのお：石橋もお姉さんも、何が何なのか：」

介人に二人のやりとりの意味は悟れなかった。

「んーん、気にしないでいいわ」

『『ただいまーっ』』

石橋家の玄関から数人の子供の声がした。

「あら、佳代たち、お泊まり会終わったのね。ごめんね、私ちよっ
と行ってくる」

「おう」

亜矢はスリッパをパタパタさせて廊下を小走りしていった。

「石橋、“かよ”って？」

「妹たちだ。昨日から今日まで幼稚園のお泊まり会だったんだよ」

「へー」

階段からドタドタ駆け上がる音がする。勢いよくドアが開かれ、
四人ほどの園児が流れ込んできた。

「いーちばーん♪」

「にばーん！」

「さーんばーん」

「ビリっけえ：」

それぞれが元気のいい声や、がっかりした声を出す。

（流石に元気がいいな、子供は）

「：あねきー。あれ、だれー？」

年が上の方の男の子が介人を指差す。

「こら浩二、人を指差さないの。それと、“亜矢お姉ちゃん”でし
よ」

亜矢がたしなめる。

「おねえちゃんのカレシ？」

今度は下の方の女の子が言った。

「え？」

「違うわよー。この人もなんとなく違ったの」

「だめだったー」

「だめー」

残りの三人が介人を指差す。

「だから人を指差すなって、あと失礼だからダメ呼ばわりすんな」
今度は亮が言った。

「「はーい」」

「谷嶋君に紹介するわね。こっちが浩二と佳代。二人とも五歳よ。
で、こっちの二人が健二と佐代。二人とも三歳。ほら、介人お兄ちゃんにご挨拶」

「こんにちはー」

「ちわー」

亜矢が言うと、弟たちが挨拶した。一人だけ恥ずかしそうに挨拶しない子もいた。

「じゃあ、亮。私、夕食の買い物行くから、あとよろしくね」

「え、マジか？」

「今夜はみんな大好きミネストローネ♪というわけで面倒見ててね」
結局、亜矢は返事も聞かずに部屋を出ていった。

「じゃあ、石橋の弟たちが落ち着かないだろうから俺も…」

「待った」

帰ろうとすると、亮は介人のくるぶしをガッチリ掴んだ。介人はその感触にゾクリときたので、思いきり振り払った。

「な：なんだよ石橋」

まだ治りきってない対人恐怖の感覚を足に残したまま、介人が言う。
う。

「弟たちの面倒見んの手伝ってくんねえ？：一人だとハードなんだわ、これ」

「……」

介人が見た亮の顔は、妹たちに色々な方向へ引っ張られていた。

「いでっ！健二、まぶたは引っ張るな！」

「…頑張ってなー」

「待てって、介人！」

結局は面倒を見ることにした。

「りょーあにき、ゲームしよー」

浩二が亮の袖を引っ張る。

「えー、だってお前弱いもん」

「つぎはかつもん！」

「…よし、じゃ、二人がかりでこい。健二、やるぞ」

「うん」

男同士だけあって、亮は上手く相手をしている。流石は家族といったところか。

「かいとにいい、これー」

「ん、何？」

その一方、介人は妹二人分を頼まれていた。佳代は人形をおもちゃ箱から引っ張り出してくる。

「おままごとー♪」

「うん、じゃあ、何の役かな？」

「いぬー♪」

「え」

介人は見るからにブサイクなブルドッグの縫いぐるみを手渡される。

「犬…」

「でばんはまだだよー」

「では…ちよ、石橋？佳代ちゃんって…」

「ん？ああ、そいつ劇とか好きなんだよ。だからままごとだろうと、脚本通りにいかないと泣くからな」

亮はゲーム画面を見ながら答える。

「脚本？どこ？」

「…佳代の頭の中」

「無理！えっと、佐代ちゃんは…」

助けてもらおうかと思い、もう一人の妹、佐代を探す。

「……」

佐代は部屋の隅で絵本を開いていた。

「佐代ちゃん、本読んでるの？」

「…」

黙って頷くと、佐代は読書に戻った。

（恥ずかしがりやなのかな）

ちよっと興味があつたので、どんな本か聞いてみた。

「…ゆめじま」

小さな声で佐代が言った。

「夢島…？」

介人はそのタイトルに聞き覚えがあつた。すぐに思い出せないのは、中学校以前のことだからかもしれない。

「古い本なの？」

「…うん。こないだ、あやおねえちゃんがね、かってくれたの」

ということは、介人が幼稚園に通っていた頃だ。

「この本：多分読んだことがあるかも」

「おにいちゃんも？」

「うん：誰かに読んであげた」

今、介人の脳裏には、幼稚園の教室の片隅にいる光景が映っていた。

本が好きだった俺は、隣の病気がちだった女の子によく読んであげていた。そのときの女の子は、

『これ読んでみて』

と言って、俺に教室の本を片っ端から持ってきた。

『うん』

俺の読み方は、特に上手とは言えなかった。でも、その女の子はいつも楽しそうに聞いてくれた。

（誰だっけ？…あの女の子）

「…おにいちゃん？」

「…」

佐代の声で介人は現実に戻された。

「何でもないよ。ちょっと懐かしいなって」

「かいとにい！ブルちゃんのでばん！！」

後ろから佳代の怒鳴り声がある。

「ご、ごめん！…あ、佐代ちゃん」

「？」

「その本、俺が一番好きだったんだ。…多分」

「…さよもね、このほん、すき」

ぎゅっと本を抱き抱える佐代。

「うん」

介人は佐代の頭を軽く頭を撫でてから、急いで佳代の所に戻った。

夕方。ようやく亜矢が帰宅し、介人と亮は解放された。

「悪いわね、谷嶋君。頼んだわけじゃなかったのに」

玄関で亜矢が言う。妹たちは今頃、部屋で亮とじゃれているだろう。

「いえ、別に…」

「じゃあ、今日のお礼に夕飯食べていかない？」

「え、いや、あの…」

介人が戸惑っていると、亜矢は強引な感じで介人の肩を叩いた。

「いいのいいの。いつも作り過ぎたくらい余るしね。ね、どう？今日

日は他にグラタンがあるけど」

ミネストローネとグラタン。美味しそうな組み合わせだけに、

普通なら二つ返事でOKしそうだ。

「：や、やっぱり遠慮します。今日は和食的な気分というか、なんというか…」

しかし介人は誘いを断った。少し悪い気もしたが、亜矢はあまり残念そうではなかったので、介人はホッとした。

「そう？それなら仕方ないわね」

「：じゃあ、そろそろ帰ります」

「あ、待って。一つ聞かせてくれる？」

「はい：？」

「：谷嶋君さあ、私に会ったとき、握手したじゃない？」

介人の手が潰れそうになったあの時だ。

「何で一瞬、躊躇ったのかな：って」

「何でって：それは」

介人にとって、対人恐怖症のことは隠す気はないが、それで余計な気を遣われるのも嫌だった。それ故に言葉がどもる。

「あの様子は女の子が苦手ってわけじゃないわよね。もっと別な理由？」

「……」

「：事情があるんだ？：まあ、深くは聞かないから」

察してくれたのか、亜矢は話を打ち切った。

「じゃ：お邪魔しました」

「あ、そうそう。佳代と佐代、谷嶋君のこと好きだって言ってたわよ♪」

「……」

その言葉を聞いて、介人は自然に笑みが溢れた。背中を向けていたので、亜矢には見えなかったが。

「また遊びにきてね」

「：はい」

玄関を出て、介人は帰路についた。ここでちょうど携帯電話が鳴る。

「?：あ」

由奈からだった。

「はい、もしもし」

『やーっと出た。もう、何してたの?』

少し不機嫌そうな声だった。

「え?」

『昼過ぎから何回もかけてたのにき、介人出ないんだもん』

「ええ?」

そういえば、石橋家の妹たちを相手にしてて、携帯電話なんか気にしていなかった。

『一回電話切って見てみればー:』

「は、はい」

通話を切り、着信履歴を見る。

「げ:」

由奈の履歴は十回近くあった。介人は再度、由奈に電話する。

『:…:はい、もしもし』

「あ、あの:」

『まず言うことは』

「:…ごめんなさい」

『よし、許したげる。にへー♪』

途端に元気な声に変わった。

「一体何の用件なんですか?」

『え? 別にないよ。ただ話したかっただけ』

「あ: そうですか」

だったら怒らないで、と介人は思った。

「今日は何やってたの?」

『えっと、石橋の家で:』

介人は今日の出来事を話した。どの話も、由奈はそれなりに楽しんだり、呆れたりしてくれた。

『じゃーねー』

「はい、おやすみなさい」

介人は電話を切る。

(……)

明日は何をするかを考えた。学校から借りた本は読み終えたし、何の予定もない。部活もしてないから全然暇だ。

(…明日になってから考えよう)

日曜日。

「ふあ……あふ」

塚原真理の目覚めは九時だった。

「今日は買い物行かなきゃ」

真理も由奈と同じく一人暮らしだった。両親が海外で暮らそうと言ったのだが、真理はそれを断って日本に残ることにしたのだ。

(あーあ、今月末は実力テストかあ：嫌だな。外国語ってちんぷんかんぷんなんだもん)

ちなみに彼女の英語の平均点は35点。英語が苦手だから外国へ行きたくなかったのも一つの理由だ。

(せっかくだし：やっしーを誘おうかな)

着替えを始めながら携帯電話を開く。ストラップも何もない、落ちていた色の薄い携帯電話だ。

『………はい、もしもし』

介人が電話に応じる。ゆっくりとした喋り方からして、向こうは起きたばかりのようだ。

「やっしー、おはよー♪」

『…え？まさか塚原先輩ですか？』

「うん。ね、やっしーは今日は暇？」

『…何で俺の番号知ってるんですか？』

介人は少し警戒してるような雰囲気だった。

「由奈ちゃんに教えて貰ったの。それより暇かな？」

『由奈さんが？…またあの人は勝手なこと』

迷惑そうではなかったものの、介人は少し呆れていた。

「ねー。ひくまゝかゝる？」

話が進まないことに正直イラッときた真理が“ほんの少し”声を大きくした。

『すっ、すみません！大変暇です！』

「ちよつと買い物付き合って欲しいんだけど、大丈夫かな？」

『構わないですけど、二人だけで…ですか？』

「ああ、大丈夫。ちよつかいなんて出さないから。由奈ちゃんに怒られちゃうもん」

未だに勘違いをしている真理。

『だから由奈さんとはそんな関係じゃなくてですね…』

介人は弁解しようと試みた。

「わかってるよ。どこまで行っただの？キスはした？」

『……全然わかってない』

介人はボソツと呟く。

「照れない照れない♪」

『違いますよ！』

「はいはい。じゃ、お昼頃に舞津駅前でもいい？」

『…はい』

そして正午を少し過ぎた頃。二人とも五分前に着き、それほど待たずには済んだ。

「しっかりしてるね、五分前行動」

「あ、どうも」

真理の私服は大人っぽかった。キメにキメたオシャレというよりは、清楚なお嬢様をイメージさせる。

「やしーはお昼まだ？」

「まだですよ」

「私も。ちょっと食べてから行こ？」

向かい側の“押忍バーガー”を指差す。

「そうですね」

ちょうどいい腹の空き具合いで二人は店に入った。

「押忍チーズとホットドックと押忍チキン：あとコーラで」

真理は速攻で注文を終える。

「押忍バーガーとポテトMと：メロンソーダ」

注文を終え、少し待つとメニューがトレイに乗って出された。二人は窓際の席を選んで座る。

「塚原先輩、結構食べるんですね」

「そうかな？いつもこれくらいだけど」

そう言って美味しそうにチキンをかじる。

「いつもって：太りませんか？」

「む。やっしー、男の子として減点」

ちよつとむくれた真理。

「あ：すいません、つい」

「太らない体質なのっ。それに、美味しいものはたくさん食べたいじゃない」

「はあ：なるほど。それより、今日は何を買うんですか？」

「一週間分のおかずと、洋服かな。：あ、ポテトちょうだい♪」

真理が介人のポテトを一本摘み、一口でパクりつく。

（本当によく食べるな。スタイルいいのに：着痩せしてるのかも）

「：：：やっしー、今変なこと考えてたでしょ？」

食えることを止めた真理は笑顔で睨む。

「い、いえいえ：」

あの後、介人は真理について行って、お約束通りに荷物持ちをさせられていた。両手両足がどっさり袋で埋まっている。

「だ、大丈夫？」

真理は、やりすぎたかな？と言わんばかりに話しかける。

「：持たせた人の言うセリフですか？」

「ごめんってば。少し持つから」

真理が介人の右手を楽にしてあげた。

「でもごめんね。あと一ヶ所だけ」

（ひいい：）

介人がうめくと、突然後ろから肩を叩かれた。

「！：」

一瞬息苦しさを感じたが、すぐに治まる。振り替えると、佐紀と初めて会う気の優しいような男がいた。二人は腕を組んでいる。

「やっぱりやしーだったか」

「二宮先輩：」

「あ、佐紀ちゃん。誠君も」

誠というのは佐紀が腕を組んでいる男のことだった。

「誠君は佐紀ちゃんの彼氏なの。ね？」

「あ、うん。まあ：」

誠は分かりやすく照れていた。

「え？二宮先輩、彼氏いたんですか」

「世界が羨む程ラブラブだぞ〜♪。ちなみに私と同級生ね」

佐紀はこれ以上ないとまでに誠の腕にしがみつく。

「恥ずかしいってば佐紀：。で、塚原さん。そのやしーって人はもしかして：」

照れていても拒絶しないだけあって、二人の相思相愛はよく分かる。

「違うよ。由奈ちゃんのだもん」

「風戸さんの？：ふーん、やっぱり年下好きなんだね」

「か、勝手に納得しないでくださいよ！それも違いますから！」

「え？そうなの？」

二人の勘違いがそのまま誠に伝えられてしまったようだ。

「また照れてる」

「照れてる」

「やっぱり」

三人は勝手に納得していた。

「…だからあ…」

「ねえ誠、次行こ次」

「うん。じゃあ二人とも、またね」

佐紀と誠は人混みの中に消えていった。

「ばいばーい」

「…すつごく幸せそうでしたね」

「うん」

真理は二人を笑顔で見守ってるようにも見たが、介人は、

「……………たまにそのバカップルぶりがムカつくけどね」

と真理が言ったのを聞き逃さなかった。きっと今は恐ろしい形相になっているに違いない。

「ま、まあとりあえず、早く買い物終わらせましょうよ」

「…そうだね」

介人は真理に刺激を与えないようにヘコヘコついていった。

「っはあゝ…疲れた」

帰宅した介人はベッドに前倒しになる。

（塚原先輩、いつもあんなにまとめ買いしてるのか？）

あと一ヶ所だけのはずが、気が付けばもう五件寄っていた。もちろん、その間に介人の持つ荷物が軽くなることもなかった。

「『荷物持ちありがとう』って最後に何か渡されたけど…何だろう」
脇に置いた小さな紙袋を見る。手に乗る程の何かが入っているようだ。

（開けてみるか…）

紙袋の口を開き、更に中に入っていた小箱を開ける。

(……?)

入っていたのはお揃いの銀の指輪二つだった。二つということは、一人のための物ではない。それが意味するのは、

「……………まったくあの先輩は！」

携帯電話を引っ掴んで着信履歴からある人物を探す。

「……………やしー？どうかした？」

真理だ。当然このことを問い直すためだ。

「先輩、何ですかこれ」

『これ？』

「これ、ペアリングじゃないですか」

『ああ、それ。安物だけど、由奈ちゃんが好きそうな色だったから』
この人は……。と言いたい気持ちを押し込み、代わりに溜め息を漏らす。

「由奈さんとは違うって何度も言ってるじゃないですか。俺は由奈さんのことそういう風に思ってるじゃないですし」

『またまた〜♪』

「あーもう、一体何を勘違いしてるんですか？全然付き合っていないんですって！」

全然理解してくれない真理にどうしようもない憤りを感じた。だから声も自然と大きくなる。

『…え、じゃあ本当に違うの？』

「違います」

『……………』

真理は電話の向こうで黙りこくってしまった。

「……………塚原先輩？」

『……………ペ、ペアリング使えるときが来るといいね♪じゃねー♪』

プツツと会話から逃げる音がして電話は切られた。

(……………まあ、分かってはくれたのかな？)

こうして介人の一週間が終わった。突発的に色々なことがあった。風戸由奈と会うことから始まり、幼馴染み（？）の加賀可葉香やその友達の石橋亮。その姉の亜矢、由奈の友人の塚原真理と二宮佐紀、佐紀の彼氏の誠。思えばもの凄い早さで知り合いが増えていった。

その中で介人も変化していった。初めは誰とも一緒にしようとしなかったが、対人恐怖症を克服するために握手の練習をしたり、他人と話したりした。電話も久しぶりにしたし、他人の家に遊びに行ったのもそうだ。ついさっきは、自分からも他人に電話をかけたのだ。

（…これで毎日が楽しくなるといいけど）

不安はあるが、それよりもこれからの期待が大きかった。

「……………寝よう」

介人は疲れた体を休ませるため、電気を消した。

第5話

介人の日常に変化が訪れてから三週間。時は既に五月を迎えていた。

強かった春一番も大人しくなり、日本の人々は、安定した気候の日々を送ろうとしている。

「……」

石橋亮もその一人だった。

亮は弟と妹たちを起こさないように静かに着替え、そつと一階のリビングに降りた。

「おはよう亮、朝ご飯はそこに作ってあるからね」

亜矢はコーヒーを飲みながらソファーに寝そべっている。

「はよ。姉ちゃん今日は出るの遅いの？」

亮は椅子に腰を下ろし、いただきます無しに食べ始めた。

「うん。休講」

「ふーん：今何時？」

「んー？今は：七時半。あ、お父さんとお母さんはもう仕事で行っちゃったからね」

亜矢が時計を見て言う。亮は嘘つきな姉を疑ったが、部屋の時計も同じ時刻だったので安心した。

（出るまであと四十分もあるか）

テレビを点け、いつものチャンネルボタンを押す。

「……………」

『八時三十分！八時三十分！』

マスコットキャラは残酷にも、亮が遅刻しそうな時間を告げていた。

「…姉ちゃん、俺のケータイ」

「はいっ♪」

ニコニコしながら亮の携帯電話を手渡す。亮は最初に確かめなか

ったことを後悔した。

「八時三十：やべっ！！」

「あらら、間に合うかしら？」

「また嘘つきやがったなこのクソ姉！この時計まで細工して！」

悪態をついて、自室に鞆を取りに行った。

「んー、気持ちいい♪朝から我が弟を騙せる：気分爽快♪」

「ざけんなっ！行ってくるっ！！」

亮は出掛けに鞆で亜矢の後頭部を叩いた。

自転車で全力ダッシュをしたものの、亮は結局授業開始に間に合わず朝から息切れし、疲弊していた。

「あークソ、皆勤狙ってたのによー。出鼻くじかれちゃった」

別にわざわざ狙うものでもない。

「石橋君、災難だったね」

今は休み時間。亮は介人、可菜香に朝の出来事を話していた。

「：そうだ。うちの姉ちゃん天災そのものだ」

「でも、お姉さんはそれほど悪気があるわけじゃないし、石橋君が寝坊したのも悪いんだから：」

可菜香は既に亜矢を知っているの、彼女のことはよく知っていた。

「だからって起こしもせず、しかも一言も謝らねえんだぞ。騙されてる方は散々だ」

「：うん、それは素直に認める」

このとき介人は、可菜香の一瞬げんなりした顔を見た。そして聞いてみたくなった。

「可菜香も騙されたことあるの？」

「う、うん：前に、ちょっとね」

「前に：ああ、犬の鼻ぐふおっ！」

何かを言いかけた亮の口を、可菜香が素早く教科書で叩き塞いだ。

石橋はいきなりの不意打ちに体がのけ反る。

「その話はカイ君の前でしちゃダメえーッ!!」

「え？俺聞いたら、まずかったの？」

「ダメ!!」

普段は大人しい可菜香がこうまで必死になるのは不思議だったが、介人は彼女の名誉のために、深く聞かないことにした。

「痛うつ。わかったよ、この話はオシマイな。それはそうと、加賀と介人は部活決めたのか？」

「部活かあ……」

唐突な話というわけではなかった。つい先週、部活動紹介が終わったばかりなのだ。

「……俺は入るつもりは無いな」

「うーん……図書委員会があるから私も。石橋君は？」

「いや、俺も部活はパスだ」

会話に花は咲かなかった。

「……なんか、つまんねえ学校生活じゃね？俺たち」

「……………」

三人の気まずい空気を遮るようにチャイムになる。

「……お、おい、早く行こうぜ。美術の小林、遅れるとマジでうるせえからな」

「う、うん」

三人は美術室へと足を向けた。

一方、由奈のクラスでは。

「へへー……♪」

朝から終始笑顔の絶えない佐紀の姿があった。

「ご機嫌だねえ。真理、どしちゃったの佐紀は？」

由奈が尋ねる。答えは分かっているが、念のため聞いた。

「先週末に誠君と二日連続でデートしたから浮かれ気分なんだよ、

多分」

「うわあ、やっぱり。誠君も頑張るね。お財布の残り大丈夫なのかな？」

「誠君、そのためにバイトのシフト増やしてもらったんだって…」

「……大変なんだねえ、男の子も」

二人はチラッと満点フヌケ顔の佐紀を見る。

会う度にあんなに嬉しそうにされていては、男の方も頑張りたいくなるもののだろうか。

「いやあ、真理も佐紀も、そんなに私の誠を誉めないでよ、もー♪」
「誉めてねっつの…うあっ!？」

由奈は真横に異質なオーラを感じた。

「…由奈ちゃん」

真理だ。顔の端で青筋が立っている真理だ。

「な…なーに？」

「ハリセン無い？」

「無いよ」

「そう…残念」

真理から発せられたオーラは消え失せた。

(よっぽど彼氏欲しいのかね、真理は…)

由奈は、ちょっとしたでも親友の助けになれないかを考える。

(うちのクラスで…勇太はダメだ。真理はチャラ男嫌いだし。：萩野君もダメだし：あとは、めばしい人いないなあ)

溜め息について見渡す。真理が好みそうな男は見当たらなかった。となれば、自然と下級生に考えが赴く。

(介人：は可菜香ちゃんだし、となると)

「あ、亮君だ。真理、亮君は」

「へえー、由奈ちゃんは二股かけてたんだ？ やっしーがいるのに」
今回の真理の言葉は冗談だ。もちろん、大分前に介人は由奈が好きな訳ではないと電話で知ったからだ。

「違うって！ 今フリーの男がいるの。真理が好きそうな好青年が」

「ホント？」

ガタツと机に手を置いて、由奈に詰め寄る。

「…でね、誠がさあ」

「佐紀ちゃん、ちょっと黙ってて」

まだ話してたの、と佐紀を黙らせる。

「ねえ誰？誰？」

「言っとくけど、介人じゃないからね」

介人も一応フリーなのだから、忠告は必要だった。これも可菜香のためだ。

「あれ？違うの？やしーなら即OKだけど。一緒に買い物も行ったことあるし」

「それは聞いたけど、介人を想ってる娘のためにも、ここは退いてあげてよ。ね？」

「はい…」

真理はどこか残念そうだった。

「で、その友達の石橋亮君ならどうかなって」

「うん、私もちょっと会いたいかな…」

放課後、真理と由奈は介人のクラスを訪ねた。真理は見えないように廊下で待つ。

「…というわけで、真理と試しにデートくれないかな？」

由奈が小さく合掌して亮に頼んだ。

「介人、加賀」

「「？」」

亮は介人、可菜香と肩を組み、由奈から少し離れる。

「これはどういうことだ？」

「…まあ、ドッキリでは無いとは思う」

「が、頑張ってね」

それだけ言うと亮は肩組みを止め、由奈に向き直る。

「喜んでデートさせて頂くッス」

「「決断はやっ」」

介人と可菜香のツツコミ声が揃った。

「こんにちはー」

返事を聞いた真理が教室を覗き込んだ。

「じゃあ、早速行こっか」

「え、今から…？」

「大丈夫、私行きたいところあるから、リードの心配はいらないよ♪」
真理は亮の腕をひっ掴んで半ば強引に亮を連れ出した。

「…さ、二人とも。後つけよう」

由奈が残った二人に言った。

「え…見守らなくても別に大丈夫そうじゃないですか」

「にへへーっ♪暇だからさー。可菜香ちゃんも気になるっしょ？」

「まあ…ちょっとは」

「よし、行こう！」

校門からしばらく歩くと、真理は亮の手を引いてカフェに入っていった。

「おー、真理かなり積極的…」

「私には真似出来ないです…」

由奈はともかく、可菜香も意外と興味津々だった。

せっかくなついて来たのに、介人だけは蚊帳の外である。

「……………ん？」

と、介人は何かの気配を感じとって後ろを向いた。

「……………」

「介人？行くよー」

別に誰もいなかった。介人はおかしいと思いつつも、由奈たちに呼ばれて店内に入った。

「ほら、介人と可菜香ちゃんは二人だけで…ね？」

二人の肩を叩く由奈。

「はい？」

「えええっ!?!」

可菜香は過剰に驚いていた。

「介人、頑張れよぉ♪」

「あ…待って風戸先輩…」

可菜香が止めるのも聞かず、由奈は他人のフリ。

「何名ですか？」

「一人でーす」

由奈は真理に見えない程度の離れた席に向かった。

「……………」

可菜香は耳まで赤くなって、介人をチラチラ見ていた。

「…て、店員さん、二人です」

「うゝ…」

介人の後ろについていく可菜香。

（二人でって…風戸先輩、いきなりすぎるよぉ…）

「……………」

席に座った介人は、亮と真理の会話を聞こうと耳を澄ます。

「……………」

店内の音楽と周囲の雑音等のせいで聞こえなかった。

「……………」

「可菜香…?」

「はひっ!?!」

緊張で黙っていた可菜香に話しかけたら、奇声で返事をされてしまった。

「しっ! バレるバレる…!」

「あ…こめんなさいいゝ…」

『ご』と聞き取れない程にか細い声で謝る。

「うーん…由奈さんとは聞こえるのかな」

「ご注文はお決まりですか？」

ウェイトレスが介人たちの席に来た。

「あ、はい。俺はコーヒート…」

「…紅茶で」

「はい、少々お待ちください……………ふふ」

介人は、妙に笑顔なウェイトレスが去り際にクスリと笑ったのを見逃さなかった。

「……あー、あれか。初々しいカップルだと思われてんのかな？」

介人は軽く冗談を言ったつもりだった。

「そうだと…いいね」

「へっ…？」

可菜香はとてつもなく恥ずかしいことを言ってしまった気になって、顔を手で隠した。

「や、違うの！そうになったら嬉し…じゃなくてっ！ほ、ほらっ、石橋君たち見張らないと」

「あ…ああ」

そんなに恥ずかしがられると俺まで…

介人はそんな自分を誤魔化すために、亮たちに集中した。

「見た感じ……あっちは塚原先輩に引っ張られている状態だな」

やがて亮が引っ張られながら店を出る。介人たちも注文したものを飲み干して尾行を再開した。

「…由奈さん、もう止めませんか？」

「大丈夫、馬に蹴られないようにはするから。で、可菜香ちゃんとは何か話したの？」

「いえ、特には…」

「…へたれっ」

由奈が介人の頭を指で小突く。

「なっ、何ですか？」

由奈が介人とガツと肩を組んで声を潜める。

「可菜香ちゃんすっかり塞ぎ込んでるから何か言ったと思えば…特に何もお？介人は二人きりで何も感じなかったわけ？」

「それは……それなりには。けど、可菜香とはただの…」

「でも、それなりにはでしょ？だったら」

ここで介人がぐったりしてきた。

「…………あの、そろそろ放してください…気分が」

「あっ、ごめん…あーもう、とにかく介人は深く考えすぎ。少しは直感で動きなよ」

そんな行動なんて無茶だ。

確かにそうかもしれない。

介人が思ったのは両方だった。

…それよりもだ。

もう人との接触は大丈夫なはずなのに、何故さつきはすぐに苦しくなったのだろう。

由奈さんとだから…か？

だとしたら、尚更何故だ。

この鼓動の激しさは。

「…あの」

ずっと黙っていた可菜香が口を開いた。

「石橋君たち、いないんだけど…」

「「あ」」

見失った。

「ありゃ…仕方ない、諦めるか。介人、今日はアレやろ」

由奈が言ったのは対人恐怖症の克服練習のこと。それは五月に入っ
つていても続いていた。

「ああ、はい」

「アレって何ですか？」

それについては、可菜香はまだ知らないことだった。

「え……っとねえ」

由奈は介人に目配せする。

教えたら…マズイかな？

そう言いたげに見たら、介人は小さく横に首を振った。

「：別に、ちょっとした日課だよ日課。あんまし気にしないでいいから」

由奈はそれにならって軽口ではぐらかすことにした。

「そうですか：。じゃあカイ君、先輩、また明日」

「じゃあな」

「ばいばーい」

可菜香が見えなくなった後で、由奈が介人に尋ねた。

「対人恐怖症：言わない方がいいの？」

「：…変に気を遣われたら、友達として付き合いづらくなりますから」

「：…うん。ほんじゃま、始めよっ」

介人の手を掴んで、帰り道を歩く。

「：でも、もうそろそろこれも卒業かな：」

介人は既に、握手程度では普通でいられるようになった。

クラスでも、特別仲が良いのは可菜香と亮。それ以外でも、少しずつだが友達が増えてきている。

もう助けは入らないのかもしれない。

「：…介人、今日で終わりにしようか、これ」

「え：？でも俺は：」

まだ自信が無い。そう言えば、今日で終わらなくて済む。

介人は一瞬そう考えた自分が不思議でならなかった。

「平気だよ、私のお墨付きだもん。介人はもう、一人で友達作れるよ」

対人恐怖症からの卒業。今まで介人が願っていたこと。

でも、介人はこの練習を止めたくはなかった。

「：はい。今までありがとうございます」

そんな思いも、事実の前には通用しない。

「うんうん。じゃあ、卒業祝いとお礼を込めて、明日購買のコロッケ奢ってね。私は二個」

「……はいはい、ちゃっかりしてますね」

「にへ〜♪」

そして、今まで通りの別れ道に繋がる。

「じゃーねー」

「はい」

…介人はこれまでの由奈との付き合いを思い出してみた。

いつでも一番に俺を気遣ってくれて、まるで姉のような存在だった人。

調子に乗りやすいけど、滅多に怒らない優しい先輩。

ただの友達ではなくなっていた、心から信頼出来る親友。

「…明日はコロッケ奢りだったな」

そうだ。放課後に会えなくなるとかは関係ない。

もう友達なのだから。

俺のために手を尽してくれた先輩なのだから。

そう思ったら、ようやく対人恐怖症から脱出できそうな今の自分が誇らしく思えた。

「お礼のメール送ってこ………ん？」

脳を刺激した違和感。

偶然聞こえた、自分より若干ずれたタイミングの足音。

その音に、介人は後ろを振り向く。

「……………」

直後に少し乱れた足音はしたが、誰もいなかった。

だが、昼間の尾行中に感じた気配と似ていた気がした。

（……………つけられる理由は無いはずだけど）

この気配を感じたのも今日が初めてだ。

最近の自分に何も無ければ、つけられないはずである。

（……………）

気が付けば、介人は足を早めてその場を去っていた。

そしてこの夜は、この奇妙な気配が気になって仕方がなかった。

翌朝。眠気と欠伸を抑えた可菜香が教室に着くと、亮と介人が雑談を交わしていた。

「おはよ、カイ君」

「ああ、おはよ。今、石橋から昨日のことを聞いている」

「あ、それ私も聞きたいな。昨日は尾行したけ…あわわ」
言いかけた可菜香は慌てて自分の口にチャックする。

「で、聞いてくれよ。喫茶店出た後はな…」

可菜香が思うに、亮の言い方からすると、介人から尋ねたのではなさそうだと思った。

この後、淡々とデート内容が語られる。

「真理先輩には引っ張られっぱなしだった。何だかなあ…」

「不満なのか？」

「いや、そうじゃない。そうじゃないんだけどな…」

亮はそれっきり何も言わず、後で聞いても、亮はうんうん唸っているばかりであった。

（まあ、俺には関係ないか）

介人はそう割り切って、深くは探らないことにした。

放課後、可菜香は図書委員会の仕事で一人だけ残っていた。

図書室で本の整理だけだったので、それほど時間はかからない。だから余計に面倒とも言えるけど。

「えっと…これは文献の棚で…：…あ、もう…また辞典の所に漫画が置いてある。ちゃんとしまつてよお…」

ぶつぶつ文句を言いながらも、順調に仕事は進む。

もうすぐ終わるかと思った頃、図書室のドアが開いた。

「…誰かいますー？」

本棚の奥にいたので互いに姿は見えなかったが、来たのは介人だった。

「あ、はい。本の貸し借りですかー：あ、カイ君」

本の山を抱えて出てきた可菜香。

「可菜香？：ああ、図書委員の仕事か。本返しに来たんだよ」

「あ、じゃあそこに置いとい：ひゃあっ！」

可菜香が本と共に前に転んだ。床に敷かれた絨毯に躓いたらしい。

「おい、大丈夫か？」

「あうー、ちょっと痛いかも：」

本たちはクッションにはならず、固い背表紙が体中にゴツゴツとした痛みを与えていた。

介人は散らばった本を集め、テーブルの上に積む。

「あ：ありがとう」

「手伝おうか？」

「え？ううん、大丈夫。あとは辞書の棚をチェックするだけ：」

そう言って向かった可菜香の表情が凍り付いた。

介人も不思議に思って近くに行く。

「うわあ：」

呟きが口から出るほどの惨状だった。

辞書を置くべき棚は辞書以外の本が乱雑にねじ込まれ、更には嫌がらせのように辞書が逆さまだったり背表紙にそっぽを向かれていたりした。

それも棚の中全部。

「た、たまたまだよね：」

「何とたちの悪い」

こんな事をした輩は余程本に恨みがあるのか。

「なあ、やっぱり手伝おうか」

可菜香は棚を見つめながら、聞こえないほどの小さな溜め息を漏らす。

「：じゃあ、お願いします」

介人と可菜香は辞書以外の本を棚から降ろす作業から始めた。

「カイ君」

「ん？」

作業が始まってから数分もしない内。

辞書を一つ一つ正位置に回転させて戻していると、可菜香の方から話し掛けてきた。

「カイ君ってさ…その…す」

「す？」

「す…だ、誰と仲良くなった？入学してから」

可菜香は言いかけた『す』を取り消した。

「うーん…」

介人は記憶のページをめくる。

「最初に由奈さん、塚原先輩、二宮先輩…で、可菜香と石橋、石橋のお姉さん、誠先輩、あとは上野や山本とか…ああ、高田もだ」

思い出す内に自分でもちよっぴり驚いていた。

本当に昔の自分では想像もつかなかっただろう。

「で、それがどうかした？」

「でね…」

いつも以上に遠慮がちで歯切れの悪い可菜香。

介人も彼女の次の句を待ったために手を止めた。

「…一番仲が良いのは誰かなあ……って」

「仲が良い人？」

初めはそんなことを聞く理由がわからなかった。

しかし、ふと過去に聞いたある人の言葉が蘇る。

『可菜香ちゃん、介人と一緒に帰りたいんだよ』

『介人は二人きりで何も感じなかったわけ？』

その時、介人の中にある、薄々感じていたかもしれない可菜香からの想いが確信に近づいた。

（んなわけ無いか）

結局のところ、それは自分の思い込みではないだろうか。

まさかこんな質問だけで可菜香が自分を好きと決め付けるのか？

その悲観的な思考は、確信を一気に勘違いへと陥落させた。

「一番ね…多分、由奈さんかな」

「え…」

ほのかな期待があったらしい。

可菜香の表情は曇って、俯いて表情も見えなくなる。

「こっちに来て初めての友達だし、何より…俺が色々助けて貰ってる」

「…いい」

可菜香が何かを呟くが、介人には聞こえなかった。

「俺に結構優しくて、何と言うか…そう信頼出来る人で」

「もういい」

可菜香は今度はハッキリ聞こえるように言った。

キツく、重く、低い調子で。

「……………」

「仕事、もうそろそろ終わるから。後は私だけでやるよ……………カイ君は先帰ってて」

介人は豹変したような可菜香の態度に戸惑うばかりであった。

「でも」

「いいから。帰ってて」

それから暫くは互いに何も言わなかった。

やがて、介人の方から立ち上がる。

「…………じゃあ、また明日」

静かに図書室を去る。

心なしか、ドアを閉めるのもかなり静かだった。

足音が遠ざかるのがわかると、可菜香はその場に座り、近くに置いてある本を抱え込んだ。

「……カイ君。まだ思い出せないのかな」

そんなことを考えたのは、介人が由奈のことを、こっちでの『初めての友達』と言ったからだ。

「私は…私の初めての友達は、カイ君なのに」
そこまでならまだ許せた。

だが。

由奈のことを話すだけであんなに嬉しくされたのであっては、腑に落ちなかった。

自分よりも、あの人がいいのか。

あの人が好きなのか。

「ちよつと言いが悪かったかも…」

もういいだの、先に帰れだの言ってしまった。

これでは彼を自分から嫌ってるのと変わりないではないか。

「世の間違ってるよお…」

一般大衆は、思い通りにいかないからこそ人生は面白いと言うが、それは間違いだと可菜香は思う。

好きな相手が中々自分に振り向いてくれないから、間違いであると思う。

非常に理不尽で利己的な眩きだった。

言ったと同時に更なる後悔がのしかかる。

「カイ君、夢島の本の事も忘れちゃったのかなあ…」

あからさまにしょぼくしてみる。周りには誰もいないので、単なる空振りだ。

(…)

ずっと目を閉じれば、あの頃の思い出はすぐさま網膜に映し出される。

…幼い頃。

見知らぬ男の子に夢島という本を読んでもらっていた。

生まれた時から人よりも言語の成長が遅く、幼稚園の年長になってもあまり上手く話せなかった私。

しかも病気がちで、そもそも幼稚園に来る日が珍しかった。

だから、同じ組のみんなと仲良くなりづらかった。

でも、彼だけは違った。私に色々な言葉を教えてくれた。

難しくても、彼が教えてくれたものはすんなり頭に入ってくる。
何故…？

簡単だ。私は彼が好きで、もっと仲良くなりたくて一生懸命に言葉
を勉強していたからだ。

彼が近くにいてくれる。

ずっとこんな日々を過ごしたかった。

だけど…

『あの子はな、カナとは違う小学校に行くんだ』

父がそう告げたとき、私は滅茶苦茶にぐずった。

『何で？何で何でっ！？』

『カナの行く小学校は、あの子の家からじゃ遠すぎる。だから仕方
ないんだ』

そんな事情はわかりたくなかった。

『じゃ、私もそっちの学校行く！』

『無理だ…歩いて一時間はするんだぞ？諦めなさい』

『やだっ！』

『可菜香、言うこと聞きなさい』

『やだっ…やだやだっ！』

ぐずった私はいつまでも泣いていた。

一緒にいたいと思えた人。

それは間違いなく初恋だった。

『カイ君と同じ学校に行くのっ！！』

思い出の中で叫んだ声は木霊せず、すぐに消え失せる。

「！！」

可菜香が目を開けた。

そこは、それほど時間が経過してない図書室の中。そこから見える
数々の本棚が、可菜香を現実に取り戻した。

「寝ちゃった」

今の夢を覚えている可菜香の目が潤んだ。

「……嫌な夢…見ちゃった」

病気が回復しかけていた、当時の加賀可菜香が必死に反抗した出来事。

あの頃は彼との別れが辛くて、卒園式でどれだけ泣いたことだったか。

「……やめよう」

少なくとも、今はその大好きな彼と毎日会える。あの時のことはもう悔やむ必要なんて無い。

「さあ。仕事片付けなきゃ」

気がつけば、可菜香は自然と気分が晴れていた。

（カイ君。私、もうちょっと頑張ってみるから。いつか、ちゃんと私の気持ちを知ってもらおうね）

一方。

帰宅途中の介人は苦悩するばかりであった。

「怒らせたかな？……えーっ？何で？俺、何か変なこと言ったか？考えれば考えるほど頭上のクエスチョンマークが増える。」

「ああ、帰っちゃったけど、とにかく謝っとかないと……」

携帯電話を手に取り、メールのボタンに親指を乗せる。

「…待て、こういう時はメールより電話で謝った方がいいのか？」
親指をアドレス帳のボタンに移す。

「………」

…押す踏ん切りがつかない。

仕方なく携帯電話をしまう。

「…明日だ。明日学校で…な」

辺りが段々と薄暗くなる。空の朱みは黒に近い群青色へ染まりつつあった。

「……っ!？」

まただ。

また、あの足音。

最近になって現れた、自分とは妙に合わない、あのズレた足音だ。介人は横目で見るように左向きに振り向く。

「……………」

いる。

姿は見えないが、塀づたいに影が伸びていた。

大人よりは小さいが、子供ではない。

介人の影の長さと比べても、ほぼ間違いなく高校生ぐらいの背だった。

（何で…俺の後をつけるんだ？）

介人は足を早める。

後ろの影も足を早める。

ちやうど一拍遅れで、スピードを合わせてくる。

「…っ！！！」

「！」

急に振り向くと、逃げきれなかったその影の正体が露見した。

「…っ…よ、よお」

挨拶をしたのは女の子だった。ポニーテールが目立ち、吊り上がった目は少し怖い印象がある。

その女の子は、介人のよく知る人物であり、

「早瀬…」

顔も見たくない相手だった。

「…久しぶり」

早瀬と呼ばれた女の子は片手をスチャツと上げる。

「失せろよ」

唸るように介人が言い放った。

「ちょ…待っ」

「うるさい、黙れ」

女の子に向かって、ましてや普段の介人ならそんな事は言わなかった。

今が普段の介人ならば、だ。

「待って！」

彼女は介人の袖を掴もうとする。

「触んな！お前なんか！」

介人は力の限り振り払う。

「……谷嶋、お前まだあの時の事、怒ってんのか？」

彼女は男勝りな口調であった。

「……」

介人の目つきはノコギリの刃のようにトゲトゲしく、冷たいものに変わっていた。

いや、正確には違う。

むしろ、『戻っていた』と言う方が正しい。

以前の、全てを拒絶するかのような目つきに。

「俺、謝りたくて」

「殴った相手にか」

……早瀬蓮。
はやせ れん

介人が中学生の頃、つまりは昨年……

介人が数人に袋叩きにされた上、親友と思っていた友達からのとどめの一撃を受けた校内暴力事件。

蓮は謝りながらバットを振り下ろしたその張本人である。

その日以来、介人は彼女を避け、高校もわざわざ遠所を選んだ。

そうやって蓮を忘れ、誰も信じずに生きていくはずだった。

なのに。

蓮は別の高校の制服を着ているのにも関わらず、介人の前に現れた。

「……」

介人がこんな対人恐怖症になった元々の原因は蓮。

少なくとも、介人はそう思っていた。

「谷嶋には何度も言ったじゃん……あの時は仕方なく」

「仕方なく！？脅されてたとはいえ、躊躇無く俺をぶん殴って！！」

全治二週間の入院までさせて、主犯の奴らが更正施設に送られて：後になってごめんごめんごめんと口だけで謝ってきやがったよな！？」

介人の中の何かが切れ、恨みが込められた言葉の矢は蓮に容赦なく撃ち込まれる。

蓮は我慢が効かなくなったらしく、肩を震わせ、しゃくりあげた。「だって、だって俺：」

「黙れって言ったぞ。大体、泣いたからって許すわけないだろ」
「……………」

蓮の様子からは、謝りたい気持ちが表れるように見える。

介人もそんなことはわかっていた。

だが、謝ったところで対人恐怖症の過去を拭い去ることは出来ないし、介人のトラウマも残り続ける。

だから許さない。

介人は踵を返して、蓮がついて来られないように走った。

走ってから数分：自宅付近で振り返ったが、蓮がついて来る気配はない。

介人は玄関のドアに寄り掛かり、額に手をおいた。

「お互い忘れて会わなけりゃよかったのに：何でいるんだよ」

その夜、介人は夕食も食べずに部屋に寝転がっていた。

「介人、夕食本当にいらないのね？」

「ああ、いらね」

母は心配そうに介人の背を見て、その場を去った。

「……………早瀬：」

蓮は小学生時代からの友達『だった』。

隣の席だったのもあってか、介人とはすぐに仲良くなり、毎週末によく一緒に遊びに行くほどの仲にまでなった。

「……くそっ！気分悪いな」

介人は思い出すのを止めた。

「……………」

苛立ったまま仰向けになっていると、携帯電話が着信音を奏でた。

「……………」

だが何を思ったのか突然、介人は携帯電話の電源を切る。

そして明日の授業の準備に取り掛かった。

（…今は誰とも話したくない）

ちゃっちゃんと準備を終えた介人は電気を消して、ベッドに潜った。

（最悪だ…今日という日は）

第5話（後書き）

急展開、更に終盤に入りました。

さて、途中に色々ほのぼの学園ストーリーを挟みましたが、ここからは真面目な話になります。

・由奈から対人恐怖症卒業を与えられた介人。
しかし、介人の心境に変化が訪れました。

『このまま由奈と恐怖症克服の練習を続けたい』
これが意味するのはやはり…？

・可菜香も、介人に振り向いてもらおうと頑張ってます。
あまり目立った頑張りはありませんが、そこが健気なのです。

・亮は真理とデートしてしまいました。

真理の心境が明らかでない上、石橋は何か不満足な様子。
二人の気持ちの真偽は…？

・そして、介人の思い出したくない中学生時代。

突然現れた早瀬蓮に、介人は激怒してしまった。

蓮は介人に謝ろうとするが、それさえも拒絶される。

介人の心の傷を無理矢理開き、おまけにえぐってしまった。

彼の前に現れただけで。

…蓮。

彼女が物語の鍵であり、介人の心の鍵でもある。

石橋亮の件を除き、

この物語は、全て谷嶋介人の気持ち次第で違う結末を迎えるだろ

う。

作者の僕が選ぶ結末は：

第6話

翌朝。

介人は酷く寝不足の状態に登校してきた。

「谷嶋、はよー」

「おはよ」

クラスメートに挨拶を返していき、ようやく自分の席にたどり着いた。

「ふう…」

まぶたを擦り、机に突っ伏す。

昨夜、介人は蓮のことばかりを考えていた。

絶対に許さないと誓った人物。

唯一憎しみをたぎらせている人物。

その心の片隅で、介人は何故か昔の蓮の笑顔ばかりを思い出していた。

（友達を殴る奴は…友達じゃない）

それでも、彼女に対する介人の大部分の認識は『悪魔的な憎悪を抱くべき人物』でしかなかった。

「あの制服…この辺りじゃ見えないな。一体どこの…」

「よっす、介人」

亮がたった今着く。そして荷物を置いたらまず真っ先に介人の席に来た。

「石橋…」

「眠そうだな？今朝のニュース見たか？」

「いや…」

その今朝はちょうど見る気も失せていた。

この日の介人は、朝食は食べたが、それきりは学校のこと以外で何もする気すら起きなかった。

携帯電話も今は電源を切りっぱなしである。

「通り魔、また出たらしいぞ」

「通り魔…？先月の初めくらいに出たあれか？」

その事件は介人の入学式の翌日辺りから報道されていたが、犯人は未だ捕まっていない。

「犯人な、どうやら女らしい。あと、全部の事件が被害者の頭に打撲だってよ」

「そう言ってたのか？」

その問いに亮は頷く。

「ふーん」

「何にせよ、そいつは馬鹿だよな。どうせ殴りたくなったとか、くだらない理由だろうし」

「だろうな」

二人が話を終えて少し経つと、可菜香が入ってきた。

「石橋君、カイ君、おはよう」

「はよ」

「あ…」

介人はすっかり忘れていた。可菜香を怒らせたような気がして、今日謝っておこうと思っていたのを。

「あ…：…かな…」

「カイ君、昨日はありがとう。手伝ってくれて」

「え…」

可菜香は怒るところか、昨日の仕事の手伝いに感謝していた。

「何やってたんだよ」

「図書室の本の整理。ちょっと悪戯があったから手間取りそうだったんだけど、カイ君が」

「ほー」

亮が少しにやついた目で介人を見た。

「何だよ」

「いやぁ別に」

別に、の目では決してない。

「それより、お前も答え出せたのか。塚原先輩のこと」

「ぐ…」

亮の表情が一瞬にして苦悩へと変貌する。

「ああそうだったよなあ…一体俺はどうすれば」

亮は頭を抱えながら席に戻っていった。

「悩んでるね、石橋君」

「…何を悩んでるんだろうな」

二人も不思議に思っていた。

少なくとも、見た目に問題は見つからない。ルックスも釣り合いがとれている。

真理は亮を気に入ったとすれば、亮が拒まない限り上手くいくはず。

しかし、肝心の亮が何かに悩まされている以上、明確な答えは聞けそうにない。

「…：何かあったのかな」

「…かも、な。…：？」

と、校内放送を告げるチャイムが鳴った。

『1・Cの谷嶋、1・Cの谷嶋。今すぐ職員室に来なさい』
それだけ言うと、放送は終わった。

「俺…：？」

介人は急いで自分の記憶を探る。

…何も悪いことはしてない。

となると、何故…：？

「谷嶋、何かやらかしたのかよ」

近くにいた萩野が茶化した。

「何もしないって。行ってくる」

介人は小走りで職員室へと足を運んだ。

すぐに着いた職員室では、何やら妙なざわめきがあった。
それが気になりつつも、介人は戸をノックして開ける。

「失礼します」

「おお、谷嶋。お前に面会だ」
呼んだのは担任だった。

「大事な話らしい。遅刻扱いにはしないから、ゆっくり話してこい」
「誰ですか？その人は…。：！」

介人は朝から嫌悪感最大の相手と出くわした。

「……………」

早瀬蓮…だった。

彼女の様子は悪化して見えた。今は俯きの角度といい、足取りの遅さといい、昨日より暗くきこちなかった。

「谷嶋。第二会議室が開いてるから、そこでな」

担任はそう言って職員室を出た。これからクラスのHRだろう。

「……第二会議室だろ、来いよ」

「……………」

蓮は何も言わずに俯いたまま、介人の後ろについていった。

二人が歩く会議室までの道のりは短いのに、本当に気まずく、嫌だった。

廊下で何度か、蓮がちゃんとして来てるか介人が振り返る度に、蓮はビクツと肩をすばめて後ずさっていた。

そして着いた会議室は、誰もいなくて、話し合いには絶好の場所であった。

「……………」

「……………」

向かい合って座ったものの、蓮は口を開かない。

やむなく、介人から聞くことにした。

「で、また謝りに来たってか」

「…そうだよ」

「そっちがわざわざ学校休んでか。ふざけるな、許さないって言うたろ」

一言毎に怒りが比例して募っていく。

「じゃあ…どうしたら」

ボソツと呟いた蓮に対し、介人は机をとんでもない強さで叩いた。
「ひっ…」

「どうしたらじゃない！許さないって言ってんだから、お前も諦めて帰れよ！！」

「ご、ごめん…ごめん…俺…ごめん…ごめん…ごめん…」

蓮の目から一瞬にして涙が溢れた。俺に殴られると思ったのか、両手で頭を庇っている。

こんな様子は、『あの一件』が起きる前の蓮では想像もつかなかった。少なくとも、運動が好きな熱血、且つ活発な元氣娘という性格だった。

こんなにも変化しているのも、言うまでもなくあの頃が原因だ。

「泣くな。何度も言わせんな、泣いても許さないって」

介人は容赦なく言葉を叩き込む。そして最後に、

「もうあの時のことは忘れてろ。あと、二度とここに来るな」と言って席を立った。

「…谷嶋」

「……………」

呼ぶ声も聞かず、介人は会議室から去った。

後から微かに聞こえる啜り泣きにも動じずに…。

教室ではHRがちようど終わったばかりだった。介人が入ると、亮と可菜香がいの一番に尋ねに来る。

「よ。何だった？」

「くだらないこと」

本当にくだらない。

それは介人だけが…当事者だけが思ったこと。

「ふーん」

亮は特別深くは聞いてこなかったもので、介人は少し安堵した。

「可菜香、何か大事な連絡あった？」

「ううん、特には。一時限、音楽だから移動だよ」

「わかってる。ちょい待ってて」

やがて昼休みに入り、可菜香と亮がお昼を誘いに来た。

「よう」

「一緒に食べよ」

「おう、もちろん」

この挨拶も、もはやいつも通りになっていた。

近くの机を寄せて、各々が昼食を広げる。亮と可菜香は家族の弁当、介人はコンビニのパンだった。

「お前またパン？」

亮が不思議そうに言う。

「またってなんだよ。昨日はおにぎりだったけど」

「いや、そうじゃなくて：お前ん家のおばさん、弁当作らないのか？」

「作らねえよ。家は親父もいないし、昼とかはパートで忙しいからな、作ってもらうと手間かけさせちまうし。大丈夫、別に困ってはいない」

介人の言葉に、可菜香はうーん、と渋る。

「でも、買い弁ばかりだと体に悪くないかな？」

「平気だろ、一食くらいは」

「そうかな…」

会話の最中、廊下から走る足音が。

「わっ!?!」

ガラッ!?!といつになく強めに開けられた教室の戸から、由奈が出てきた。

「……………」

由奈は『よーす☆』の明るい声も無しに、不機嫌そうに介人を睨みつけた。

「あ…こんちは、由奈さん」

「…ちはっす、風戸先輩」

「こ、こんにちは」

可菜香と亮はそんな様子にビクビクしながらも挨拶をかけた。

「介人…ちょっと来なさい」

普段聞いたことのない、低い声。介人は由奈の不機嫌の原因がわからなかった。

とりあえずは席を立て、由奈と一緒に廊下に出る。

「何ですか、由奈」

最後まで言い終わらない内にゴツン、と脳天に握られた拳が下ろされる。

「いだっ…!」

「電話もメールも無視して、おまけに約束も忘れて平然とお昼ご飯とは…介人くんも随分生意気になったみたいで、非っ常くにお姉さんムカついています」

「電話とメール…?…約束…:…あっ!!」

色々不愉快なことがあったせいか、介人は記憶から二つのことが抜けていたのをすっからかに忘れていた。

一つ。昨夜から携帯電話の電源を切りっぱなし。

二つ。対人恐怖症の卒業祝いに、由奈に購買のコロッケを二つ奢るという約束。

「あ、あの…これには深い訳が」

「そう言う人って、ほとんどがたいしたことない理由だって…知ってた?」

本当に深い訳があるのに、理不尽なことだ。

「ご、ごめんなさいっ!」

介人は覚悟して頭を下げた。

「…:…まあ、介人は嘘つくような男の子じゃないし、今回は許したげる」

が、由奈はまたもや以前のように、すんなりと許してくれた。

「電話もメールもしない状況なんて、何か…あったの?」

「…いえ、何も」

介人は話す気にはなれなかった。

（由奈さんのことだ。蓮のことを話したら、俺と仲直りをさせようとするかもしれない）

この時…介人は初めて、由奈に隠し事をした。

（何があるうと許す気はない）

「ふーん…わかった。で、お昼一緒にいいかな？」

「それはもちろん」

「にへー、いい返事♪あ、コロッケはまた明日でいいから」

由奈を引き連れて教室に戻ると、まだ戸惑っている可菜香と亮がいた。

「あれ、普段通りに戻ってる…？」

「先輩、もう終わったんすか？」

「まーね。お昼、私も一緒に食べるよ♪」

その後は妙なきこちなさも無く、いつもと同じ時間が過ぎていった。

放課後。可菜香は介人と共に下校していた。

五月だというのに、春にしては少し暑いくらいだった日和。

放課後になっても、まだアスファルトの熱は冷めていなかった。

「数学の時、何読んでたの？」

「ライトノベルだよ。浜田が気に入ってる作品だから借りたんだ」

「だめだよ？そういうことしちゃ」

「いいんだよ、ノートはちゃんと写してるからさ」

そう言うと、可菜香は機嫌をそこねたと思ったのか、すぐに取り繕った。

「大丈夫。それくらいじゃ告げ口したりしないから。私もちょっとやってるし…」

「何を？」

「ちよつとね。趣味かな」

可菜香が照れ臭そうに頬を掻く。

「何？教えてくれない？」

「うーん……じゃあさ……笑わない、かな？」

可菜香がはにかんだ顔で聞いてきた。笑うにしろ笑わないにしろ、介人でなくても聞きたい人は必ず、

「笑わない」

と、言うだろう。それでも可菜香は信じたらしく、照れながら少しづつ話し出した。

「……絵本とかの物語を考えてるんだ。私ね……ハッピーエンドで終わる本が……その、好きだから。石橋君の弟や妹たちみたいな小さい子が読む本とかも」

「童話とか？」

「う、うん。楽しい部分ばかりあるけど、それがあるからこそだと思ふの。読んでてハラハラするのもいいけど……私はずっと楽しい気持ちでいたいから」

可菜香が寂しげな表情へと変わり、歩きながら介人より少し前に出る。

「もう、悲しいのや寂しいのは一回……ううん、一瞬でたくさんだから」

介人が横目で可菜香を見ると、何故かずっと遠い目をしていたように見えた。

「……何か実感込もってない？」

「うん。……実際、あったから。カイ君が覚えて……ううん、知らないだけで」

「中々な……思い出せないんだよ。何しろ小さかったし、俺も色々あった」

そう言った介人に、可菜香は不思議がって尋ねてきた。

「うん、前も聞いたけど、色々って何があったの？……あ、それとも、言いにくいこと……だった？」

「……今は話す気になれないかな」

「……そっかあ」

いまいち納得のいかない気分だった。

スツキリ全部話せない介人も、全部聞けない可菜香も。
ただ、このすぐ後にそんなことは気にならなくなった。

「…谷嶋」

「!？」

呼ばれた声に介人が振り返る。可菜香もそれにつられた。

「早瀬…」

呼び止めたのは蓮だった。

彼女の目的は言わずもがな、『谷嶋介人への謝罪』だ。

「……くっ！」

気付けば、介人はいきなり可菜香の腕を掴み、進んでた方向に走り出す。

「ちよっ…!？カイ君？どうしたの？」

「悪い…今は聞かないでくんないか？」

可菜香は痛そうに顔を歪める。介人は自然と握る力が強くなってきていた。

ああ、イライラする。

本気であいつなんかいなければいいのに。

本当に忘れたい奴なのに、なんでいるんだよ。
今。

ここに。

大体許すわけがないのにいつまで引きずってんだ。

早瀬もいい加減にあの事件を忘れて、他の友達でも作ればいいのに。

介人の苛立ちは限界を超えそうな位まで蓄積されていた。

あんな奴今すぐ死——。

「カイ君ってば——！」

「！」

可菜香の呼びかけに、激しく巡っていた思考が停止する。

「ねえ…どうしちゃったの？さっきの人、カイ君の知り合いなの？」

「……」

掴んでいた手を緩める。後ろから蓮が追ってくる気配は無い。

「知り合いなら何で避けたの？あの人と何かあったの？ねえ、カイ君」

「うるさいな！少し黙っててくれよ！！！！」

介人がついに癇癪玉を爆発させた。

「！」

可菜香は突然のことに身を縮めた。

「…ごめん」

そして少し遅れて謝ってきた。それを聞いた介人も声を張り上げたことに後ろめたさを感じる。

「いや…こっちも、ごめん。別に怒ってた訳じゃ…ないんだ」

「……うん、わかってる。私も無神経だったし」

五月なのに、辺りには冷たく、痛い、氷の針が刺さっているような空気が漂っていた。

「…今日は、もう別々に帰ろっか」

「……だな」

可菜香は返事を聞いた途端、介人を見ずに軽く駆け出す。家は同じ方向なので、どちらかが先行する必要があったからだ。

見えなくなった後で、介人はこめかみを押さえた。

「…本当にイライラする。これも全部…」

あいつの、早瀬のせいだ。

介人はアスファルトをわざと踏み鳴らすように、のしのし歩いていった…

翌日。

「ぶはーっ！」

ガラガラッと教室の戸を開けて亮が駆け込んできた。息を切らすどころか、既に虫の息だ。

「ギリギリだぞ石橋。もっと気を引き締めんか」

今はHR。担任は眉をひそめて亮を睨む。

「文句は、あ、姉に言ってください：毎日こうなると：死んじまいますって」

クラスに『またか』『やれやれ』と小さな呆れ笑いがおこる。

「またか、石橋」

当然、介人もその仲間だ。

「そーだよ、まただよ。あのクソ女がまたなんだよ。今朝は目覚まし止めてやがった。予備にかけといたケータイのアラームまでよお……」

「わかったわかった、いいから席に着け」

長く愚痴りそうな亮を担当が止めた。

「……」

この何の変哲もなさそうな朝、可菜香は笑いも呆れもせずに黙ったままであった。

「……」

介人の方はそれを見てやきもきしていた。

八つ当たりのように声を荒げたのは、やはり謝るべきだろう。

「……それじゃ、HR終わり。森川、書類早く持って来いよー」

担任がのろろ教室を出て行き、クラスには賑わいが戻った。各々が終わる瞬間に席を立ったり、寝始めたりする。

「可菜香、その……」

「あ……」

介人は可菜香に昨日のことを謝るべく話しかけた。可菜香もそれをすぐに察する。

「大丈夫、私は気にしてないよ」

「……そっか。なら……いいんだ。本当にごめん」

介人は軽く頭を下げる。可葉香はそれをわかっていたかのように動じず、「でもね」と続けた。

「悩んでるなら相談して欲しいな。少しでも楽になるなら尚更。カイ君なら、いつでも相談に乗るから」

「……悪い、今は無理だ」

以前と同じ答えを繰り返す。

「待つよ」

「？」

「カイ君が話したくないなら、それまで待つよ」

可葉香は安心させるようにゆっくりとした口調で言った。

「ね？」

「…うん」

昼休み。やる気の無い学生が唯一楽しみにする時間。

介人、可葉香、亮、由奈に加え、今日は真理も合流していた。

流石に全員が同じ教室で食べるには他の人が狭そうなので、中庭に集まることにした。

「大所帯になっちゃったっすね」

苦笑しながら亮が呟く。

「…あ、そういえば二宮先輩はどうしたんすか？」

「沙紀ちゃんは今頃誠君とラブラブランチ。お昼誘っても沙紀ちゃん全然気づかないんだから、もう…」

全員、気まずそうに誘いを断る誠の姿が頭に浮かんだ。

「でさ亮君…返事、考えてくれた？」

「え……や、それはもうしばらく」

介人はすぐそばでヒソヒソ話す二人の声が聞こえたが、内容は聞かずとも大体わかるので放っておいた。

「そーいや介人と初めて会ったのもここだったよね」

「ああ、ですね」

「入学して一週間だっけ。その時から介人は一人で食べてたし、よそよそしかったな」

あの時は由奈とのお昼がたまたま一緒の場所になったと思っていた。

が、よくよく考えれば由奈が一人でいた介人を見つけたから来たのかもしれない。

そう思うと、何だか運命的なものを感じてしまった。

「さっ、食べよっ」

みんながコンビニの袋や弁当袋を広げ、個人個人の食卓を作る。

「あれ、介人またおにぎりか？」

気が付けば、亮が介人の手荷物の中を覗いていた。

「またって何だ。昨日はパンだったろ」

「やつしー、いつも買い弁なの？」

真理も覗き込むように言った。

「あ、ええ…まあ」

「ちゃんとしたもの食べてる？」

由奈は介人の奢ったクロツケをほくほくと食べている。

「私が作ってきたげよっか？」 「え…」

驚いたような声を上げたのは介人ではなく、可菜香だった。しかし誰も気に留めず、話は進む。

「そんな、いいですよ別に」

「えー？」

と、残念そうに言う。

「由奈ちゃんのは美味しいから大丈夫だよ」

「お前、そんな羨ましいこと断るなよ」

真理と亮も由奈を煽った。

「じゃあ亮君、私も作ってきてあげようか」

「え…あ、それは、その…何と言うか」

「？」

「で、どうかなー可菜香ちゃん。私が作ってきていい？」

由奈は口ごもった亮を置いて、何故か可菜香に尋ねた。

「え、ええっ？」

由奈の意図が読めない可菜香は困惑する。

「?……何で可菜香に聞くんですか？」

「いーからいーから」

可菜香がずっと迷っていたように考えてる間、介人は黙々と食べ続ける。

「カイ君…あの、私…」
「？」

可菜香の声で食べるのを止めた介人は耳を傾ける。

「私が…作っても…あの、おべ、お弁当…」

絞り出した言葉はそれだけだったが、言わんとしてることはわかった。

「……いや、いいよ別に。無理しなくても」

「む、無理じゃないよ、平気」

「でもさ」

断ろうとすると、みんなの諭す声が聞こえた。

「「介人」」

「やっしー」

「……」

ああ、もう…わかったよ。

そう諦め、「じゃあ出来る日だけ頼むよ」と可菜香に告げた。

「…う、うんっ。明日から作ってくるから」

一目でわかる嬉しさを顔に出す。

「んじゃ決まったところで、話は終わりっ。早く食べないと昼休み終わっちゃうよ」

由奈の言葉で気が付けば、もう半分以上時間が過ぎていた。

…やがて、食べ終わってそれぞれの教室に帰る時、介人は由奈に声を潜めて呼ばれた。

「よかったね、お弁当」

「…半ば無理矢理言わせたくせに」

「にへ☆でもさ、可菜香ちゃんも健気で可愛いなー。ああいう娘がお嫁さんの男の子は幸せだと思うよー。好きな男の子には尽くすかも」

からかうような口調で介人を見てくる。

「だっ…そんな、俺はただ弁当を作ってもらっただけで」

「『ただの友達』だったらそこまでしないとと思うな…ねえ？」

「なっ…まさか」

介人の顔がみるみる赤くなっていく。

「…そ、そんなわけないでしょ！あいつが俺なんかを好きになるわけが…！」

「え？」

介人が大声を出したので、前を歩いていた可菜香が振り向く。

「あ…いや、なんでもない」

「何の話？」

ごまかす介人に何の話かを尋ねる可菜香。介人はますますあわてふためき、可菜香は不思議がるばかりだ。

そんな二人の光景を見て、由奈は苦笑した。

「…私、可菜香ちゃんが『介人のこと好き』だなんて一言も言っていないのになあ…」

だが、その苦笑も何故か俯いた表情へと変わる。

「……………私も、ただの友達にお弁当作ろうとしたりしないんだけどな」

可菜香ちゃんが本当に遠慮してたら、介人は私のお弁当――。

ハッとして首を左右に振る。

「何言ってるんだろ…私」

いつの間にかみんなと離れてることに気付き、小走りですわいていった。

放課後になり、速攻で帰る者とだるそうに部活に向かう者が教室を出始めた。

「……」

介人は前者である。

苛立つことがあったせいか、学校の外は逆に心が休まらなかった。今の介人は、この世の学生にしては珍しく、学校から帰るのも嫌だった。

出来ればみんなといつまでもわいわい話していたかったのだ。

「……………」

何度も言葉にならない憂鬱さを感じて、気分がぼーっとしてくる。だからなのか。

後ろの気配にずっと気付かなかったのは。

「やしま……」

「！びっくりした……誰」

だ、と言いかけて止まる。

いたのはだらんと腕を垂らしていた蓮だった。

「……何だよ、早瀬。いい加減しつこいんだよ」

「……………」

早瀬は何も言わなかった。

だが、それは昨日までの泣きじゃくる早瀬ではなかった。

「……………」

しゃくりあげる声すら聞こえない。本当に何も言わないのだ。

「おい……？」

何だ……こいつ。気味が悪いな……様子がいつもと違う。

「……気になってたんだけどな。お前、今どこの高校に行ってたんだ？」
これは再開時から疑問に思っていたことだった。この辺りではまず見かけない制服だし、何日もこの辺りに留まっているのなら、サボってることになる。

「……………」

言葉の末尾だけが小さく耳に入る。

「あ？」

次に、聞き返した介人が耳にしたのはとんでもない事実だった。

「…俺、高校行ってないよ」

「……………!？」

「あの日以来さ…受験勉強してたけど、身に入らなくて…で、第一志望…落ちた。第二志望も、滑り止めのところも…みんな」

まさか…そんな…。

俺が許さなかった…せいで？

「だからさ…俺、情けなくて家を出たんだ。それで谷嶋のいる高校の近くにまで来た」

「……………」

「そのときからかな。俺…たまにおかしくなるんだ」
「？」

蓮が近くに置いてある『何か』を取りに行く。

「過去のこと思い出した日には、気付いたら…人が倒れてて、その時の俺」

拾った『何か』を、蓮は一度振りかざし、勢いよく振る。

「赤くなったこれ、持ってるんだ」

「!!!!!!」

『何か』とは金属製の野球バットだった。蓮の言う通り、所々に生々しい赤い染みがこびりついている。

「…変だよな、俺、やってないのに。なあ、谷嶋」

この時、蓮から女の子とは思えない、暗黒の嘲笑が見え隠れしていた。

「早…瀬」

やばい。

何かおかしい。

まさか、こいつ…。

「今、通り魔がうろついてるんだってな。谷嶋も気をつけてな」
こいつが…やったのか…？

「谷嶋、俺のこと信じてくれるよな？俺、やってないだろ？」

「……」

今度は介人が何も言えない側になる。

「やっぱし信じてくれないか……だよな。大嫌いな元友達が、虫が良すぎたかな……」

蓮はそう言って、力無い歩みで近づいてくる。

「せめて、谷嶋があの時のこと……忘れてたらよかったのに」

一步、また一步と距離が減る。介人は自分の我が儘で起こってしまった事実の絶望感で身動きがとれなかった。

「……そうだ谷嶋、忘れてよ。忘れて昔みたいに仲良しになろう。ほら、ショック療法の逆をやればきつと……」

次の瞬間、蓮の動きが俊敏になる。バットも横に振りかざした。

「忘れるから……さっ！」

擬音に表すには難しそうな、鈍いかどうかかわからない音が介人の頭に響いた。

「ぐっ……！」

介人は道の端に投げ出され、俯せに寝そべる。

「があ……あ……ぐ」

とてつもなく激しい痛みが、介人の意識を闇に引きずり込もうとした。

「まだ、忘れられない？でも平気。次で終わる」

「……っ」

「めちゃくちゃ好きだったよ、谷嶋。忘れても、俺が一番最初の友達……うん、彼女になってやるからさ」

蓮は再びバット振りかざし、屈託のない、一端の女の子らしい笑顔を浮かべる。

正直それは、こんな状況じゃなければ惚れてしまうほどの可愛さだったかもしれない。

……こんな状況でなければ。

「ごめんな」

いつか蓮が介人に言った、あの事件当時の言葉。

ただ違うのは、申し訳なさそうに言ったか、喜びながら言ったか、だ。

今回は――。

「ぐあっ……!!!!!!」

後者だった。

俺の意識が……遠退く……。

やっぱり……早瀬は、友達じゃ……。

な……かつ……た……。

そのまま、介人の精神は深い暗黒の中に沈んでいった――。

第6話（後書き）

急転直下。

蓮の驚愕の現状。高校生でも社会人でもない悲劇の少女、早瀬蓮。蓮がとうとう狂気に侵され、介人を襲う。

周りには誰もおらず、頼りの友人たちは状況を知るはずもない。

介人は命を失うのか、それとも――。

…このストーリー展開は前々から考えついていました。ですが、初めは蓮は男の元親友として設定がされました。それに意外性と、悲劇を持たせるためには『少女』という設定が必要と考えたのです。さて、介人を想う人物、介人に干渉した人々はどう動くのでしょうか。

…残念ですが、これ以上書くことが見つかりません。

後は皆さんの感覚に任せます。このような文で、一人でも夢中になってくれた方がいれば至福の喜びです。

第7話

翌日。瞬く間に介人の被害の話は広まり、それを伝えられたクラスは騒然としていた。

「カイ君：が」

椅子に座っているのに、可菜香の身体はふらりと横へ傾いた。ショックで真っ青の可菜香は教室の床に倒れる。

「お、おい！」

「加賀っち大丈夫!？」

教室は更にざわめきのボルテージを上げる。

「HR始めるぞ、静かにせんか。なんだこの騒ぎは。ひとまず落ち着け、落ち着け」

担任は無神経にもざわめきに静寂を与えようと奮起していた。

そんな大人をクラスの過半数が睨み据える。

「な、なんだ」

「オッサン無神経過ぎ」

「最っ低、そして最っ悪」

クラスには介人のことだけでなく、担任への非難の騒ぎまで加わっていた。

「加賀：平気か？保健室：」

亮はその喧騒に加わらずに可菜香を心配した。

「だい：じょう、ぶ。大丈夫だから：びっくりしただけ：」

そう言いながらも可菜香の手は小刻みに震えていた。

「『だけ』ってお前：」

「……………」

この騒ぎが収まるまでには数十分掛かった――。

放課後、HRの終了とともに、可菜香は荷物をテキパキまとめ始めた。

「加賀、俺も行く…」

俺も、というのは、これから可菜香がやることをきちんと理解しているから言えた。

「石橋君…」

「風戸先輩たちもこの事件は今朝の新聞でとくに知ってるだろうしな。早く誘ってみんなで行こうぜ」

「…うん」

可菜香と亮以外にも、上級生の三人娘も当然行くことになっていた。三人も可菜香たちを連れ出そうとしてたらしい。

「やっしーのいる病院ってここから近いんっしょ？」

沙紀が事件について学校側から配られたプリントを見る。

下部には『舞津市立総合病院』と書かれていた。

「そうっす。歩いて15分ってとこっすかね」

亮が答える。

「…亮君、やっしーは…大丈夫かな？」

「………」

真理は不安を隠しきれない。亮は今度は答えられなかった。

「…風戸先輩？」

可菜香は隣で歩いていた由奈の顔色を伺った。いつもの由奈の色は無く、知らせを聞いた瞬間の可菜香のように、青く、紫がかかった色になっている。

「…頭部の強打による出血…意識は取り戻したものの…精神や脳の障害の可能性は捨てきれない…犯人はまだ逮捕されてない…」

どうやら由奈は今朝の新聞の内容をブツブツ復唱しているらしい。
「…介人…どうしよう、どうしてこうなっちゃったの…どうして…」

声はそこで途切れた。可菜香が由奈の手を握ったからだ。

「…先輩。カイ君は、きっと大丈夫です。きっと…」

由奈は、先程までの極度の緊張状態を解くことが出来た。

「……強いね、可菜香ちゃん」

「そうですか？」

「最初ショックでぶっ倒れた奴が強いとは、到底思えないがな」
亮が口を挟む。

「もうっ！石橋君！」

可菜香は照れ隠しに怒ってみせた。

「すまん、悪かった」

このやり取りを見た上級生三人娘は誰もが笑いをこぼした。

そして、急に沙紀が可菜香に話を吹っ掛ける。

「そういえばさ、やつしーの奴、最初はぶすくれてたよね？ねえ、
可菜香ちゃん？」

「え、ああ…多分。少し近寄りづらかったような…。私も入学初日はカイ君だってわからなかったし」

「でしょでしょ？それをその由奈女史が変えたんだよねあゝ♪」

ね♪と話を振られた由奈は戸惑った。

「へ？あ、まあ…ね」

「風戸先輩が？マジっすか？」

「本当だよ。亮君も、可菜香ちゃんも聞いた方がいいよ」

ね♪と今度は真理が由奈に振る。

「うえっ？」

さっきまでの心配はどこへやら。親友にそそのかされ、由奈は介人との出会い、そのこの経緯を話すハメになった。

「いや、あのね…そもそも介人に会ったのは、昼休みの中庭でね…」
その後、対人恐怖症のことも含めて由奈は洗いざらい(?)話した。

今度は少し暗めの空気が辺りを漂う。

「…カイ君、そんなことがあったんだね…」

「私らも対人恐怖症のことまでは知らなかったよ。由奈はそんなこと一度も言ってなかったし」

沙紀は珍しく気分が冷めていた。

「で、でもさあ…介人も結局それは治ったわけだし。最近じゃ心にも余裕が出来てきてるし…。だから卒業ってことで」

「その対人恐怖症の克服もよく頑張ったよねえ…愛するやつしーのためかな？」

沙紀の何気ない呟きに可菜香と由奈は同時に驚く。

「ふえっ!？」

「なっ!?! 沙紀! なんでそうなるかなっ? 私は…介人は、大切な友達として…その…」

「二人が付き合ってるとか、一時期噂もあったんすよ。男子の間で」
亮が余計なことを口走ると、真っ赤な顔の由奈はビンタでその口を叩き塞いだ。

「おぶっ!!!」

「ないないない! ありえないってば!」

沙紀はそんな慌ただしい由奈をほかっておいて言った。

「あはっ☆やつしーはいい友達持ったなあ。私も入ってるけどね」
実際そうかもしれない。

そんな気の優しい友人たちは全員、介人が元気であることを願いつつ、病院へと向かうのであった。

「…カイ君、入るよ」

可菜香がドアを開けると、上半身を上げて頭に痛々しく包帯を巻いた介人以外に他の誰かがいた。

「あら、介人のお友達？」

おそらく母であろう女性だった。

「…よかった、思ったよりやつしー元気そうじゃん」

「おばさま、はじめまして。私たち、やしし：じゃなくて谷嶋君の友人です」

真理が丁寧な挨拶を済ませると、介人の母は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「あら、そうなの…。最近息子が随分変わったと思ったら、みなさんのおかげだったのね？」

「あ、まあ：そうかもしれませんが：にへへ」

由奈が照れ隠しに頭をかく。

「わざわざお見舞い、ありがとうございます」

「どうなんすか、具合は：」

亮がそれ聞いても、状況が悪くなることはなかった。

「傷は思ったより深くはないらしいの。怪我をしたのが額だったから出血は多かったけど…。今ではすっかり元気よ」

これで全員肩の荷が下りたのは間違いなかった。

「ほら、介人、友達来てるんだから挨拶しなさい」

母が促す。が、介人がそれに従うことはなかった。

「：帰ってくれ」

「え：？」

「か、介人：？冗談きつい：」

由奈がおどけたように言うが、

「帰れって」

介人は無感情に言うだけだ。

「こら介人：！…………ごめんなさい、みなさん。息子が失礼を：」

頭を下げて謝り続ける介人の母。

「：カイ君：一体どうしたの？」

「：」

介人は何も言わず、帰れと目で告げるだけである。

「：みんな、一旦帰ろう。今日はなんかダメだったんだよ、きつと」

由奈が寂しそうに言うと、介人がベッドシートを握り締めるのがみんなにも見えた。

「…介人、頼み事があつたらなんでも言ってね。いつでも来るから」
「あの…みなさん、ちょっと廊下で待っててほしいの」

「…？はい…」

介人の母の頼みを聞き入れ、みんなは病室を出た。

「……」

みんなが無言で病室を出た後、介人はベッドにもたれた。

「…介人、なんで友達にあんなこと言ったの？」

「友達じゃない。ただの顔見知り」

「…怪我、一体誰にやられたの？意識が戻ってから全然何も話してくれないじゃない」

「…だから知らないっての」

介人はうざったい母から遠ざかるように窓側を向くように寝返りをうつ。

「…まさか、あんたが知ってる人がやったの？さっきの友達の中にいたりしないわよね？」

「違う！」

疑われた瞬間、声を荒げた。

「…ごめんなさい。でもね介人、あんたはね…前の頃のアんたに戻ってる」

「前…？」

「ほら…早瀬さん。あの時のあれがあつた後…あんた他の友達全員とも絶交したじゃない？」

「………」

事実だった。実際問題、介人の携帯電話のアドレス帳には、もう可菜香たち以外は存在しない。

「あの頃とそっくり…友達、またみんないなくなるわよ？」

「……」

少しの沈黙を了解ととったかはわからない。が、時間の都合上で介人の母は席を立たなければならなかった。

「…じゃあ、お母さん行くから」

介人の返事を聞けぬまま病室を後にした。

そして空になった病室の中で、介人は天井を見上げる。

（…もう嫌だ。どうせああなるくらいなら、友達なんかいない方がいいんだし）

この気持ちに嘘はない。

…はず。

しかし、介人の心には虚無の風穴が空いていた――。

その後、病室の外で介人の母がみんなにあることを話していた。

「…あの子ね、前に辛い事件があったの」

「それって…親友にバットで殴られたっていう…」

「ええ…。そう、みんな知ってるのね。でもね、その親友って、女の子なのよ」

「えっ…女の子!？」

亮が一番だったが、もちろんみんなも驚いていた。事件のことについては聞いても人物までは知らなかったし、普通は男の親友は男だという固定観念があった故である。

「早瀬蓮さんっていう名前だね…。あの子の親友と言ってもいいくらいだったし、介人も早瀬さんには好印象を持っていたの」

「でも…あんなことが」

「ええ…。今回も何かそういうもののせいなのか…あの子、どうやら心を閉ざしてしまっただみたいで。犯人はまだわからないままなの。介人が話してくれないから」

介人の母が重苦しい表情になる。

「…あの子は、友達に恵まれているのか、いないのか…わからないわね」

「おばさん…」

「…ごめんなさい、愚痴っぽくなって。うちの息子のお見舞い、あ

りがとうございました。懲りずにまた来てくれると嬉しいんですけど。…あの子のために」

と、頭を下げる。

「き、来ますっ。私、何度でも来ます」

いの一番に可菜香が身を乗り出す。

「…ありがとうございます」

再び頭を下げる介人の母。

「俺だって今度は姉ちゃんや妹、弟たちを連れてくる」

「…由奈ちゃん」

「来るっしょ？」

亮も可菜香に続き、沙紀と真理も由奈に目配せする。由奈は親指を立てて応えた。

「もちっ♪」

「…ありがとうございます、みなさん。…あの子はちゃんと、友達に恵まれていたのね…」

この日、初対面だった介人の母の目には涙が浮かんでいたのが見えたのだった――。

それから毎日のように、介人の病室には人が訪れていた。

「失礼します」

「おい―す」

一週間後。真理と沙紀の訪問は通算三回目であった。

「また来たんですか…」

介人は鬱陶しそうに寝たまま背を向ける。

「ねえ、やしー…やっぱり、もう友達とは思ってくれないの？」

「私たちだけじゃなくて全員だかね」

「…くどいですよ。昨日と四日前も言いました。先輩たちだって、いつ俺を裏切って何をするかわからないって」

介人はシートを握って言う。

「：同じことばかりでごめん。でも、友達にそんなことしないよ、絶対」

「やっしー、いい加減にしなよ。私らが本気でそんなことするように見えるの？疑ってる？」

さっきより強い口調の二人。

「疑ってます」

それに対して、躊躇なくハッキリと言い切った。

「な…このバ…！」

怒りにまかせて介人に何か言おうとした沙紀を真理が止めた。

「…嫌い？ 私たちも：由奈ちゃんも、可菜香ちゃんも、亮君も？」

「……」

今度は答えなかった。

「：本気で由奈のこと嫌い？」

それに一つ小さな溜め息をついて、ふと沙紀は話し出した。

「私さ、今はラブラブだけどね：実は誠のこと、最初は太っ嫌いだったんだよ？」

「…？」

意外だった。あんなにも寄り添う二人からは、そんなことは全く感じ取れなかったからだ。

「：そうだったよね。沙紀ちゃんは誠君避けてたもん。それが今ではああだもん。由奈ちゃんのおかげで」

「由奈さんが：？どういうこと：ですか？」

「にゃっはー。内心、私が一番驚いてるよ。：最初ね、誠が私に告つてきたんだけどー」

——あれは去年の秋ぐらいかな？

誰もいなくなった教室で、誠は一言、

『二宮さんが好き：なんだ』

と言ってくれてさー。今思えばなんであそこでOK出さなかったか、ホントに自分が信じられないよ。

『あつそ。私は別に好きじゃないんで。じゃーね』
でもね、誠は諦めが悪くて、それから色んなアプローチをしてきたの。

『僕がやる』

大掃除のゴミ捨てや、

『手伝うよ』

面倒な委員会の仕事。

『いいから、休んで』

誠は一つも弱音を吐かずに、懲りずに私によくしてくれた。

まだ好きになってなかった私は、ただ面倒事を片付けてくれる奴だからラッキーだと思うしかしなかったんだ…。酷いっしょ？

『沙紀、誠君は本気であんたが好きだよ。何が気に入らないの？』

『そうだよ。あんなに一生懸命な、それも尽くしてくれるような男の子、中々いないと思うよ』

由奈も、真理もそればかりしか聞かないしね。

『べっつに興味ないの。そんだけよ。それに尽くすって言ったってあいつが勝手にやってるだけでしょ？』

『わー真理、ここにツンデレがいるよ』

『あ、はは…』

まったく、真理も否定しないしさー。

『沙紀。誠君の顔とかが気に入らないならもう何も言わないけどさ、少なくとも違うでしょ？』

『……………』

もちろん違ったよ。誠は顔は悪くないもん。

ただ、何故か誠が偽善者に見えたのかもしれない…。

何の見返りも無しに人に優しくしてくるから、自然と誠のこと疑っちゃったし…。

『沙紀、最初は避けてたじゃん？でも最近はこんな感じで憎まれ口

も叩いてるし、もう好きになってたりしない？』

『ないない』

『…素直になりなつて。今時いないよ、心の底から優しい男の子つて』

…で、こんな風にこのまま時間だけが過ぎてくと思ったんだ…。
ところがね。

ある日の帰り、私が暗い夜道を歩いてたら、知らない男に襲われそうになつてさ。

『ちよつ、止めなさい！警察呼ぶからね！！』

本つつつ当に怖かったよー。電車の外でも痴漢っていうかわかんないけど、無茶苦茶に身体触られて…。抵抗しようにも包丁持っていたから…。

『あ……っ……んっ…』

『そ、そろそろ…挿れ…』

“ヤッちゃう” 一歩手前でホントにもうダメだ！と思ったら…。

『やっ…誰か助け…！！』

『いてっ！』

『…？』

地面のコンクリにカツカツ何かが当たるから見たんだ。

石ころだったんだよ。

『当たった！！誠君、そこっ！！』

由奈が投げた、ね。

『っ！』

で、次の瞬間、誠が犯人蹴り飛ばしてくれたの。そしたら臆病者だったからか、犯人はすぐに逃げてった。

こうして私は助かったわけ。『……どうして』

『風戸さんが呼んでくれたんだ。襲われてる二宮さんを見つけて』
違う。私が聞きたかったのはそれじゃない。

『私…あんたのことフツたのに、嫌ったのにさ…危ないのにどうして助けに…』

『あ…そっちか。…それは…そのー…』

『好きだからでしょ？ま・こ・と・君？』

由奈が代わりに言ったのは今でも覚えているよ。

『…』

そっか…。本気で好きだから、こんなに勇気が出るんだ、誠って。なんて考えたたら、何だかね…私も好きになっちゃった。

『あ、ありがと…。ごめんね…誠…あの返事、やっぱり取り消す』

『え？』

『…だから、付き合お？』

「というわけ」

「……………」

介人はいつのまにか身体を起こして沙紀の話に聞き入っていた。
「由奈がいなかったら誠もそこに来なかったし。本当に感謝してるのよ」

「……………」

「いつも友達のこと優先で考えてくれてさ…。いくらなんでも、由奈は友達を裏切るような真似はしないし、できないって」

にかつと笑いかける沙紀。

それに続くように真理も微笑む。

「だから、やっしー。せめて由奈とは友達でいてよ」

「お願い…ね？」

「……………」

——結局、介人は何も返事を返さず、二人に帰るように頼んだ。

「…また来るね」

「死んじゃだめだぞ？」

死ぬ程の怪我じゃない。

だが、普通に考えれば冗談でも言ってはいけないこと。ボケのつ

もりだった沙紀だったが、真理に笑顔でほつぺたをつねられていた。

「ご、ごめなひゃ！いいふぎまひた…」

謝罪を聞いて真理はよろしい、と手を放した。

「…無理して来ないでくださいよ」

介人は突き放すように言っただつた。

つまり、だつたのだが。

「『無理して』だって。逆に気を遣われちゃったね」

「?…おー。なる、そういうことなの?」

介人との面会の間は少し元氣のない笑顔だった真理は、やつとのように素直に微笑む。しかしながら、ほつぺたがヒリヒリする沙紀はイマイチ気付かなかつたみたいだ。

「また勝手な解釈…」

「…なんか安心した。みんなが嫌いになったんじゃないんだね」

文句も聞かずにそう言い残し、真理と沙紀は病室を去った。

「…調子狂うな…あの二人は」

人と話したくないはずなのに、いつのまにか時間は談話で埋められていく。

今、無茶苦茶で大きな矛盾を持っている自分が本当に嫌だった――。

（どうせ仲良くなってもまた…）

介人はベッドの上で仰向けに姿勢を直し、天井を見上げる。

（…みんなを嫌いになるつもりなのに…）

目頭が熱くなってきた。

（なんでみんな…俺に優しくするんだ……なんで…）

入院してから三日後の当時。真理と沙紀がまだ病室に一回しか訪れてない頃。

「介人…入んぞ」

ノックの後、一人しかいない病室に亮に続いて数人が入ってきた。

「あ、介人兄いだ。頭ぐるぐるー」

「痛そう…」

一度しか会っていないが、顔と声は覚えていた。

石橋家の双子の佳代と佐代、それに…。

「おいっす、介人アニキ」

「こ、こんにちは」

同じく双子の浩二と健二だ。

「…石橋…」

「まだいる。今回の説教役な」

亮が、ドアを見ると言って顎をしゃくると、今度も一度しか会ってない女性が顔を出してきた。

「はーい。お姉ちゃんです♪」

亜矢であった。まるで教育テレビのお姉さんみたいに介人に手を振っている。

「…」

その場は二組の双子を含め、静かになる。

「姉ちゃん…すべったぞ」

「あら、残念」

亜矢はそれほど残念そうな顔もせずに入ってきた。

「お見舞いに来たの。ついでにお節介」

「説教の間違いだろ？」

「あら、わかる？」

亮のツツコミに今度は嬉しそうに反応する。

（まったくのんきな…会いたくないのに…）

介人は黙って亮たちがいる方向とは反対側を見つめる。

「さて、時間がないからさくつと話すわね。…ほーら、こっち向いて」

亜矢が介人の両頬を掴んで自分に向けさせようとする。

「っ！！」

介人は無意識に全力で亜矢の手を弾いた。

「はあ…はっ…はあ…」

直後、急に心拍数は高まり、息は荒くなる。おまけにめまいや吐き気までしてきた。

介人は知っている。人一倍、この感覚を。

「対人恐怖症、直したはずよね？…戻っちゃったの？」

さっきまでにこやかだった亜矢が真剣な目つきになる。

「ど…こで、それを…おえっ」

吐き気が喉まで来そうになるのを必死で抑える。

「介人お兄ちゃん、大丈夫…？」

佐代が小さな手を介人に伸ばそうとする。だが、長女の手がそれを遮った。

「佐代、ちょっと外で待っててね。…浩二と健二と佳代も。少し介人お兄ちゃんとお話があるから。亮、ちょっと佐代たちを見ててね」

「姉貴、早く終わらせてよ」

「行こ、佐代」

「ほら、行くぞお前ら」

双子たちは亮の誘導に素直に従い、廊下に出る。

亜矢はそれを見計らってから口を開いた。

「…対人恐怖症のことは谷嶋君の先輩と亮、それに可菜香から聞いたの。なるほど、初対面の握手の違和感はこれだったのね」

「ごほっ…そ、それは…」

まだ息が調わない。それに構わずに亜矢は話し続ける。

「…どうして話してくれなかったの？私はともかく、可菜香にも黙ってるなんて…。あの子は幼なじみなんですよ？」

「今のところ…それすらわかってないんですよ」

「…そう。でもそれは今はいいの。今日は少し違うこと話しに来たから」

「…？」

「可菜香のこと、嫌いになったの？帰れ、だなんて…」

介人は答えずに黙り込む。

どうしても答えられなかった。『嫌いになったの?』という問いには。

「可菜香ね、こっちに引越してきてからはよく遊ばないし、気持ちが弱い子だったのよ。病気がちでもあったしね。でも、あることがきっかけで変わったわ」

「あること…?」

「夢島って本。この本に聞き覚えはないかしら?」

「あ…」

いつか、記憶のフラッシュバックに映った出来事。

病気がちの女の子に、本を読んであげたこと。

その本が、夢島であったこと。

「お姫様は気が弱くて、自分に自信が持てない。それを、一匹のウサギが救ってくれた。ウサギは、お姫様に色々教えてあげた。世界のこと、難しいこと、元気になる方法、笑い方…」

亜矢は夢島の内容をすらすらと取り上げていく。本もないのに、完璧に内容と合致していた。

介人も、亜矢の話が本物と一字一句違わないことを思い出してきていた。

「…そして、お姫様はウサギが好きになってしまいました。…実は、ウサギもお姫様が好きでした。その想いは、いつか二人を繋げ、二人はずっと…一緒に暮らしました」

「……同じだ」

「…ある日、泣いている可菜香にこの本をあげたの。そしたらなんて言ったと思う?」

「………」

介人は驚いていたので質問に返事が出来なかった。

「『カイ君が読んでくれた本だ』って…」

「…あいつが…」

「カイ君のことを聞いたら、大好きな人だよ、って素直に言ってた

わ。だから、私言ったの。泣いてるばかりじゃ、カイ君に笑われるよって。そうしたら可菜香、泣き止んで笑ってくれたわ。…わかる？カイ君、あなたが可菜香を元気にしてくれたのよ」

「…」

どう言ったらいいかわからなかった。

なぜなら、介人の記憶は未だおぼろげで、今の記憶の人物が可菜香とはハッキリと言えないからだ。

「そして、好きだって気持ちはず変わらず、お姫様はここまで来たの。そしたら会えたのよ、ウサギに」

亜矢は介人の近くに手を付き、真正面から言った。

「…可菜香のこと、本当に嫌い？」

「…か」

介人は今更自分の意志を曲げたくはなかった。しかし本気で一瞬、気が緩みそうになった。

（…何やってるんだ俺は。誓ったじゃないか、誰とも関わらず生きてくって）

友達なんかいらなくて。

全員を突き放して…誰が、いくらそれを許してくれると言っても、自分は自分に対してそれを許せるはずない…。

「帰って…ください」

顔を背けて言った。

「…そう、わかった、帰るわよ。でも、もう少し待っててね。…亮、いる？」

廊下にいた亮を呼ぶと、亮は待ちくたびれたように再び弟たちと入ってきた。

「…ほら、お前ら」

亮が弟たち四人の背中を軽く叩いてあげる。

弟たちは少し恥ずかしそうに後ろに何かを隠しながら介人の近くへ寄った。

「介人アニキ、ほいっ」

「どうぞ…」

双子の弟、浩二と健二が同時に折り紙の鶴を二つ渡してきた。千羽鶴ではなく、二人で一つずつの鶴。その無骨に折られた鶴は病室の蛍光灯に反射していて金色と銀色に輝いていた。

「こいつらが作ったんだ。大好きな金と銀の折り紙使って」

二人がそれを介人の脇に置くと、恥ずかしそうに亮の後ろへ隠れた。

その次は妹たちが前に出る。

「介人兄い、元気になってね」

「…読んで」

佳代と佐代は二人でひとつの贈り物だった。

介人の膝に置かれたそれは、平仮名で『ゆめじま』と書かれた絵本だった。

「これ…」

「佐代があげたいんだって。谷嶋君に。佳代も好きなのよ、その本」

「……介人お兄ちゃん」

佐代が介人の近くで顔を見上げる。

「…ん？」

「カナお姉ちゃん…昨日、寂しそうだったの。大丈夫って言ってたけど…元気なかった」

介人は、帰れと突き放したことに罪悪感が芽生えていたのは十分承知だった。

だが、それを後悔するくらいなら、それこそ友達はいらないものなのだと思った。

佐代はベソをかきそうに目を滲ませ、介人のベッドのシーツを握り締めた。

「お兄ちゃん…カナお姉ちゃんのこと、嫌いにならないで…」

「……………」

介人は、佐代の頭を撫でて安心させることも：ましてや声をかけてあげること出来なかった――。

翌週の月曜日、その放課後。

可菜香はどうにも心に落ち着きのないまま下校していた。

勉強も、絵本のシナリオを考えることもままならず、ただひとつのことが心配で心配でたまらなかった。

「おい、あの制服、どこのだ？」

「さあ：県外から来てるんじゃないかな」

「何の用事でだよ？」

そんな聞き慣れない会話を耳にし、話の中で男子学生が指差す方向を見る。

校門の所に一人の女子が立っていて、誰かを待っているようであった。

「あれ…？あの人」

可菜香は制服に見覚えがあった。

（確かカイ君がものすごく怒ってたときの…）

今見ているその学生はあの時とは印象が違った。

あの時はぐったりしてて落ち込んでいたように見えたからであり、今はその様子もなく、普通の表情であったからだ。

「……」

「あ、いた」

学生は何かを見つけると、そこへ向かって小走りに走っていく。

「え？ええっ？」

何故かそれは可菜香のいる方向だった。

可菜香は急いで後ろを振り向くが、学生と可菜香の延長線上には誰もいないので自分以外の誰かに向かっているのではないことがわかった。

「加賀さんだよな？それとも風戸さんかな？ちよつと話、いい？」

「え、あ…あの…」

「俺、早瀬蓮」

…男勝りの口調なんか気にならなかった。

『早瀬蓮』という名前を聞いた可菜香の心にはいくつもの感情が混じり、こんがらがったまま渦巻き出した。

「早瀬…さん？」

「そ。歩きながらでいいから話しよっか」

可菜香は戸惑ったまま蓮の後へついていった。

「…話って何ですか？」

「ん？たいしたことないよ。下手なことしてなければ——」

同時刻の病室で、介人は苦悩していた。

ここまで拒絶してるというのに、みんながいつまでも構ってくれるのが不思議でしうがなかった。

「…ほっときやいいのに…俺なんか」

眩きが口を突いて外へこぼれた。

ふと、脇に置いてある石橋家のお見舞いの品に目が向いた。

（…金と銀の鶴か。小さい頃、俺も好きだったな、金銀の色の折り紙）

介人は夢島の絵本を手に取り、開く。

（お姫様とウサギか…。あの可菜香がお姫様だなんて考えもしなかった。で、俺がウサギか。…違うな。俺はこのウサギほど立派じゃない。結局友達を捨てた酷い『人間』なんだ…）

こんこんっ。

「？」

と、病室のドアから昨日とは別な調子のノックが聞こえた。

「入るよ」

そう言って入ってきたのは一番見慣れた人物だった。

「…由奈さんか」

「ほらまた、初めて会った日みたいにそう露骨に嫌な顔しないの。勝手に話して帰るから」

相変わらず、ちよっぴり強引にこちらへ近づいてきた。

「…またアレですか、『みんなのこと嫌いになった？』って」

「そうじゃないよ。待って、心の準備するから…」

由奈はその質問には答えずに、突然深呼吸を始めた。

すー、はー、と静かな深呼吸を一回だけ終えると、由奈は介人の顔を見て言った。

「…私、介人のこと、好きだよ」

第7話（後書き）

またいきなりの展開に、作者自身も驚いてます。（この展開は書きはじめの段階では構築されてなかったのでも）

介人との友人関係の復活を願い、様々な形で心に触れようとする友人たち――。

可菜香の前に現れた蓮、何の理由で可菜香と話をしたいのか――。

由奈の突然の告白、その真意は――？

さあ、介人の心の物語もいよいよ『次で最終話』です。

長かった……。のんびり書き続けたせいもあるけど、初めて挑んだオリジナルの作品は本当にストーリーの構成から人物のイメージまで、何もかもが難しいのだと痛感した。

この駄文を温かく見守ってくれている方々に捧げる最終話、心待ちにしてください。

最終話：Heart Friend

可菜香は蓮についていく。ただついていくだけではなく、話をしながら。

「あの：早瀬さん。早瀬さんは：カイく：谷嶋介人君のお友達？」いきなり初対面の人にカイ君と言ってもわからないことに気付き、途中で訂正した。

「：ふーん、カイ君って呼ばれてんだ、谷嶋」

少し低めの声でそう返され、結局は可菜香の問いには答えなかった。

「：？」

可菜香は首を傾げる。

（あれ？：質問の答えは：）

聞こえなかったのかと思い、そう深くは考えないことにした。

「早瀬さん、見慣れない制服だけど：県外の学校なの？」

「：……まあね。ここからかなり遠いところかな」

この問いには答えてくれた。

無視されているのではないとわかり、可菜香はほっとする。

「で、加賀さん。病院行ったでしょ？谷嶋、あたしの何か言ってた？」

「え：？」

ざわ：。

自分の周りに蛇が纏わり付くような、ぞくりとする感覚。

何故早瀬さんが知ってるの？カイ君が入院したことを。

「：」

それほど大きな騒ぎにならなかったから、ニュースでも取り上げられなかったのに。

そもそも、さっきから引っ掛かっていた。

早瀬蓮さんは介人の母が話していた人だ。暴力事件で：脅される

ままにカイ君を殴りつけた…あの…。

「な…何も…いつもと違ってはいたけど」

「どんな？」

可菜香が言い終わらない内に蓮は詰め寄る。表情に先程と変化がないので、何だかそれが怖かった。

「！」

「どんな風なの？」

「か…帰ってくれて…みんなを避けてるみた…いに…」

「……………あつそ」

蓮は寄った顔を遠ざけ、急に冷たく言った。

「忘れてないんだ…あいつ」

「なに…を？」

「うるさいな、いちいち聞くなよ」

「っ…………」

冷たく言い放った言葉に可菜香はたじろぐ。

どうしたんだろう…何だか急に態度が…雰囲気が変わって…。

「で、加賀さん、谷嶋とはどういう関係？」

「え…」

「どういう関係？」

「それは…その…」

それは説明が難しかった。幼い頃に知り合ったとはいえ、小学校と中学と、これだけの時間が空いてからの再開では幼なじみとは言えない。

だが、ただの友達と言うのは何だか嫌だった。

「…その…あの…」

「どういう関係なのさ？」

「…………」

「…どういう関係だって聞いてるでしょ？」

先程から冷たい態度を崩してはくれない蓮の問いに、可菜香は答えなかった。

蓮はその後、可菜香にどこか理不尽な態度で質問を続けていた。

夕日が更に傾いてきた夕方の病室。介人は呆然としていた。

「は…？」

いきなり何の脈絡もなく告白を受けて。

「にへ…言っちゃった♪」

おどけた様子で笑顔の由奈。

「好きって…俺…のことですか？」

「…うん。ごめんいきなり。わけわかんないよね？」

笑顔はフツと消え、代わりに遠くを見るように目を細めた。

「でもね、今の介人は嫌いなんだ。ひねくれてるから」

「はあ？」

「それでもやっぱり好きだけど」

「…あの…」

本当にわけがわからない。

「…介人。介人は誰が好き？」

「え…」

帰ってくれ、と言うはずのことすら忘れていた。

「可菜香ちゃん？」

「い、いきなりわけわかりませんって！」

「…本当だね。でも、知りたいかな。みんなを嫌いになった介人の好きな人」

「…だから、なんでそんなこと…」

「だって…介人嘘つきだから」

介人は胸にズキりとくる何かを堪え、聞き返した。

「い…いつ嘘をつきましたか？」

「前から。今も続けてるよ。みんなが友達なんかじゃないっていう嘘」

「嘘じゃ…」

「嘘」

「本当ですよ」

「う・そ」

互いに引き下がる様子もなく、同じ言葉が続く。

「本当です」

「うゝそゝっ!」

「だから――」

「だったらなんで絵本や贈り物を大事に持ってるの?」

介人は驚いた。自分でも気が付かなかったから。

そうだ…嫌いな人からのお見舞いを大事にとっといてるなんてどう考えても変だろ、俺…。

「……無理しちゃってさ。いい加減正直になったら?」

介人はしばらく黙るが、やがて観念したように呟いた。

「……由奈さん、どうしてみんな、俺に…俺なんか構ってくれるんですか」

「ん? ああ…簡単だよ」

由奈は介人の手の上にそっと自分の手を重ねる。

「!………?」

さっきの亜矢の一件で条件反射で拒絶したはずの手は、今回はまったく反応しなかった。

「みーんな、介人の友達だもん」

「…!」

確信した。

由奈さんが原因だった。

由奈さんだから安心して触れられた。

…由奈さんだから。

「…そう、か…友達だから…」

由奈さんが友達だから安心できるんだ。

「うん。わかってくれてよかった…♪」

「……」

由奈さんだから…か。

でも…何か違う気がする…。

俺は…由奈さんのこと…今までどう思ってた？

今は、どう思ってるんだ？

「…で、聞こうかな。介人の好きな人」

「…」

…どう考えても俺の心は…。

傾かなかった。

「…あの」

介人は空いた方の手で絵本を強く握る。

物語のお姫様、それを励ますウサギが強く描写された。

亜矢の言葉も甦る。

『そして、好きだって気持ちは変わらず、お姫様はここまで来たの』

俺が…可菜香を元気にした？

『初々しいカップルとでも思われてんのかな』

『そうだと…いいね』

俺は…物語のウサギになれるのか？

『思い出してくれた？私のこと』

俺はウサギなのか？

可菜香とのやりとりが時間を遡る中、ついに最も古い時期に至る。

『バイバイ…カイ君』

…ようやく思い出せた。

「…由奈さん」

「ん…？」

「ごめんなさい…俺、可菜香が好き…みたいです」

言った途端、由奈が手を握ってくれてるのが申し訳なく思えた。

「…あー、やっぱり。負けか」

がっかりした様子はなく、勝負を楽しんだ後の選手みたいに言った。

「…」

それでも少し辛かった。由奈の気持ちを裏切ったようにさえ思えたから。

「ほらほら、そんな気にしない。いーのいーの、介人の好きな人なんて、最初からわかってたようなものだしね」

由奈は触れていた手をそっと放し、代わりに肩をぽんぽん叩く。

「んじゃ、可菜香ちゃんに謝ってきなよ。外出許可取ってきてあげるから」

立ち上がって踵を返し、ドアに手をかけようとした。

「え…あの」

「謝るときなさい。ただでさえ好きな人から突き放されたんだから、女の子は淋しがるの。これは命令っ！」

そう言いながら由奈は出ていき、病室のドアが閉まった後には静寂が訪れた。

「…忙しい人だな…いつもいつも」

気が付けば、なんだか気分が清々しかった。

友達が戻った安心感なのだろうか。それもある。

何というか、自分の気持ちに決着がついたと言うのかな。

しばらくして、由奈は病室のドアをノックし、返事を待たずに開けた。

「おっけ、外出の許可もらえたよ！さ、行ってきなよ」

「え？由奈さんは…」

「お邪魔になりたくないの。早く行きなさい」

「はい」

…ありがとうございます。それと、ごめんなさい――。

介人は心の中でそう言った。

「あの…着替えるんで…」

もちろんパジャマ姿で出かけるバカじゃない。

「あ、ごめんごめん。じゃあ、私はもう帰るから。お大事に――」

「はい、さよなら」

ドアが静かに閉じられる。

聞こうと思えば介人の衣擦れの音が聞こえたが、そんな趣味はない。

由奈は廊下から病院の外へ出た。

「……」

病室であつた出来事。見た目とは違い、介人への告白は相当な緊張を伴っていた。

だがその後、つまり今になって、その緊張は悔しさに変わり始めた。

「やっぱり可菜香ちゃんか……応援しといてなんだけど、悔しいよ……」

涙は出ない。わかっていたからだ。

「勝てるわけないよね……何年分も詰まってる想いだもん……」

介人のいる病室に、ではなく、病室にいる介人に向けて親指をグツと立てた。

「頑張れ青少年！にへ♪」

すると、由奈は半ばやけくそ気味に全力で走り去った。

「あーもう！お姉さん悔しいぞー！」

涙は出なかった。絶対に。

彼女は人前では絶対、泣かなかった――。

そこは、この舞津市にあることすらよく知られていない、工場が建ち並ぶ区画だった。

この中には誰もいないらしい。おそらく、もうほとんどが使われていないのだろう。周りの錆びついている箇所からもそれが伺えた。

「ねえ、ここ……どこ？なんでこんな所……」

蓮と可菜香は共にそんな人気のない場所を歩いていた。

「誰にも話の邪魔されたくないんだ」

「は、はあ…」

「…ここでもいいかな」

と、ある倉庫の前で立ち止まった。

「加賀さん、さっきの質問だけど…谷嶋のこと、どうなの？」

「…友達、だよ。幼なじみ」

事実。そう答えるだけのはずだったが。

「くだらない嘘だね」

蓮はそれを頭っから否定した。

「別に嘘じゃないけど…」

「その割には友達以上に想ってんじゃん。まあ、友達までだっていうならそれで都合がいいけど」

都合がよい。可菜香にはその意味がわからなかった。

「え…どういうこと？」

「ん？あいつを俺の彼氏にするから」

「!？」

可菜香は驚きでよろめきそうになった。

「い、いきなり…何を言って」

「あいつさ、俺のやらかした一件以来、ふさぎ込んだんだよ」
つい最近知ったばかりのことだった。

「…それを忘れさせようかと思って、この舞津市に来たんだけど」

「忘れさせる…って、どうやって…」

「そんなの簡単っしょ。…ほら」

そう言っつて、蓮は工場の脇の通路から何かを持ってきた。

「？」

金属のバット……。最初は何故それが忘却の素なのかわからなかった。

でも、蓮と介人の傷、おまけに昔の話で介人を殴ったことを考えたら察しがついた。

「……」

恐怖で顔からは血が引き、無意識に後ずさる。

「そもそも、俺はあんたと話しに来たんじゃないんだ」

ガラガラ…と引きずるバットがコンクリートの地面と擦れる。蓮はその音をBGMに近付いてきた。

「谷嶋があのこと忘れて、それで俺があいつと恋人になってやり直すんだ。全部とはいかないけど」

一歩、また一歩と狂気の少女が近付く。

「でも、それには邪魔くさいのがあるし。…ねえ加賀さん？」

「……っ……っ」

声が思うように出ない。

「大体、気に入らない。谷嶋に謝って、全部やり直すつもりだったのに…お前が」

「…」

「お前がなんで谷嶋と手を繋いでるんだ…。なんでお前なんだよ…」

「あ…」

可菜香は蓮を初めて見た日を思い出した。あの時、介人は蓮を見ずに可菜香の手を強引に引いていったのだ。

「お前なんか！」

蓮がバットを力の限り振り下ろし、地面がガァン！と鈍く響く。

「っ！」

気が付けば、可菜香はその場に背を向けて一目散に逃げ出していた。

「…逃げんな…逃げんなよ…」

蓮の呟きも、可菜香には聞こえない。

「…はっ、はあっ、はっ…」

息はありえないほど乱れ、目からは涙が溢れそうになった。

「助けて…助けて」

携帯電話を取り、震えを抑えて一番に頼りになる人物に電話をかけた。

着替えの終わった介人は包帯を巻いた頭に帽子を被り、看護師から「たいしたことないから今回は特別なんだけど、気をつけてね」と言われてから病院を出た。

怪我は頭以外にないから、歩く分には問題ない。走ったら少し痛みが響くくらいだ。

（可菜香…許してくれるかな…）

そんな不安をずっとずっと感じつつ、連絡を取るために携帯電話を手に――

『♪』

「わっ…？」

取ろうと矢先に着うたが流れ、危うく落とすところだった。

気を改めて携帯電話を開き、誰からの電話かを見る。

「あ…」

『加賀可菜香』――。

（偶然…か…）

通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし」

『カイ君、助けて！』

「！？」

いきなり求められた助け。何が何だかわからなかった。

『早瀬さんが、バット持って追っかけてくるの…！怖いよ…怖い…』

「……」

一瞬、どうするべきか戸惑ったが、どうにか我を取り戻し、聞くべき事を思い出す。

「今どこだ！？」

『工場みたいな所…よくわからないけど…今倉庫の番号が『4番』』

の所を走ってるの：』

「わかった！今行く！」

『早く来て：！早く、早く：！』

電話越しでも、泣きそうになっているのは伺えた。

気が動転して、介人が本来は入院中だという事もすっかり忘れていたのだろう。

通話を切らないまま、介人はすぐさま全力疾走で工場区画へ向かう。

よく知らなくても、工場なのだから、それらしい場所は見当がついていた。

「ぐ：っ」

足と地面の振動が完治してない頭に響く。だが、速度を緩めるわけにはいかなかった。

『あ：き、来た！』

電話の向こう側からは可菜香の怯える声以外に何かが聞こえる。

ガラガラ：と。

（金属バット：：！）

「可菜香！？あと10分はかかるから、とにかく逃げてろ！」

『無理だよ：はっ、はあっ、怖いよ、早く来て：：！』

荒い息遣いと啜り泣きが聞こえてくる。

「諦めんな！絶対に間に合わせるから！」

走る。

走る、走る、走る：。

工場が見え始め、更に走る――

『いやあああああっ！』

ガシャン！！

「！：！：！」

足が止まった：。

電話の向こうからだけではなく、はつきりと見える工場区画の中からも耳に入った音だった。

「……かなか…?」

『……』

向こうからは何も言わない。

「可菜香！」

頭に響く痛みを忘れ、駆け出す。

倉庫の4番を過ぎた所：4番、4番、4番…。

4の数字を探し、声の出所を目指す。

「……！」

いた。

もしかしたら死んだかと思っていた。

でも：最悪の事態だけは起こっていなかった。

最悪ではなかったのだが――。

「いっ…た…っ」

可菜香は息を押し殺して倒れていて、歯を食いしばりながら片腕はもう片方の肩をギュッと押さえている。

肩に向けてバットが振り下ろされていたのだ。

そのバットを握る人物は、悲鳴の後から介人が現れるまでは動いてなかったらしい。

「可菜香…」

可菜香との通話を切り、狂気に侵された蓮を見つめる。

「谷嶋…?」

ぱつと振り向いた蓮は幸せそうに笑い、バットを捨てて介人の近くに来た。

「谷嶋！あのさ、今から全部やり直そうと思ってんだけど、協力してくれよ」

介人はこの惨状を見て、罪悪感が喉元まで引き上げられた。

「谷嶋、忘れよう、全部。俺がやったこと。谷嶋が怒ってたこと。

谷嶋に俺以外の友達がいること」

自分が原因でこんな蓮を生み出したことに目眩がし、

「友達は俺だけでいいだろ？どうせこいつらは後で裏切るけど、俺

はもう谷嶋を裏切らないからさ」

自分が原因で可菜香をこんな目に遭わせてしまったことに、吐き気がした。

「ふ……ぐ……っ……!!」

肩の痛みを必死に堪え、可菜香は更に腕の力を強める。

さするの痛そうで、逆にそれを抑えたい苛立ちで力が強くなる。目は、とうの昔に涙で濡れていた。

「じゃ、俺、続きやるよ」

「！」

蓮の声で我に返った。

続き——考えるまでもない。

昔の自分が受けた『とどめ』だ。

「やめろッ……!!」

介人が叫ぶと、可菜香に向かおうとした蓮が止まった。

「早瀬……やめてくれ……」

この後のことを考えると、涙が出そうだった。声も自然と泣いてくる。

「お前が……俺に……したことなら、許す……から……だから、やめろ……」

「……だよ、それ……」

ぽつりと蓮が呟く。

「……何なんだよそれ……。こいつがそんなに大事かよ。俺より」

「やめてくれ……頼む……」

介人は懇願し続ける。

「もう裏切らないって誓った俺より！こんないつ裏切るかわからない女が大切なのかよ！俺より！」

「可菜香は……」

蓮の声はより一層激しさを増す。

「こいつだけじゃない！あんな奴らも、いつか絶対に谷嶋を裏切るんだ！だから俺は！」

「小さい頃からの大切な友達なんだ…だからやめてくれ…」

「！…カイ君…？」

今の…って…？――。

それは痛みを一瞬忘れるほどだった。

「…っ！そういうバカな事なんか…」

蓮は可菜香の近くに捨て置いたバットを掴む。

彼女が足を進め、バット振り下ろしたのは――。

「忘れる！」

介人の方だ。

「っ！」

しかし、それは鈍く血生臭い音を奏でることはなかった。

「……」

蓮の金属バットは介人の額の前で止まっていた。

「…はあ…はあ」

「…ふう…ふう」

互いに、リズムの違う荒い息遣いが漏れる。

少しの沈黙があり、カラン、とバットは蓮の手で脇の方へ捨てられる。

蓮は膝について泣き出した。

「……ああ…っ…うああ…っ！」

「！？」

介人は驚きが隠せなかった。

何故あそこまできて…俺を殴るのを止めた…？

「もうヤダ…なんで谷嶋は…俺のこと好きになってくれないんだよ…！」

頭をぐしゃぐしゃと引っ掻き回す。

「謝ったのに…謝ったのに…！なんで…！」

「早瀬…」

「谷嶋のために頑張ったのに……頑張って……たのに……」

早瀬は、なりふり構わず泣きじゃくっていた。

俺の心中の罪悪感はギロチンの如く、激しい痛みを感じるように心を切った。

「なんでだよおおっ!!!」

突然、早瀬は立って走り出す。

介人が来た方向とは別な、つまりは工場の奥へ、奥へと。

「早瀬っ……!」

呼び止めようとして立ち止まる。

「……」

可菜香を置いていくわけにはいかない。

蓮のことは気掛かりだが、介人も可菜香も危険に曝される可能性を考えると、今は追いかけている場合ではなかった。

「……大丈夫じゃないよな……痛いかな?」

「……平気」

嘘だ。さっきから肩を押さえっぱなしなのだから。

「もう片方は大丈夫?」

「う、うん……」

これは本当だった。

介人は、可菜香の痛まない方の肩を担ぎ、立たせる。

少しばかり可菜香の身体は重かった。恐怖から立てなくなった、

可菜香の重みがそのまま全部のしかかっていたのだ。

「……病院に行こう。な?」

「うん……」

介人は可菜香を優しめの歩調で歩かせようとした。

「わっ……!」

「!」

可菜香がふらつき倒れそうになるのを介人は慌てて支える。

どうにも歩くのは無理そうだった。

「……」

「ど、どうしよ…立てない…」

黙って見ていると、可菜香の足は震えていた。

（無理もないか…あんなことがあったら俺だって怖い）

介人は少し悩んだ末、思い付いてたが実行しなかったことを行動に移す。

「可菜香…ちよつと悪いんだけど」

「え…」

介人は可菜香に背を向けてしゃがみ、手を後ろに出した。

おぶされよ、と。

「…早く診てもらわないと。酷くなる前に…」

「……」

少しの沈黙の後、介人は背中に大きなものが乗ったのがわかった。足を持って可菜香をおんぶした。

「辛いかもしんないけど我慢してて。なるべく早く行くからな」

「うん…」

可菜香が返事するのを確認し、病院へ向かった。

（カイ君…）

可菜香は躊躇せずに乗った介人の背中で複雑な思いを巡らせていた。

（早瀬さん…カイ君が好きだったんだ…。だから、私が邪魔に…）

「……………」

介人は先程から黙って歩いている。その表情はどこか曇っていた気がした。

（…カイ君は…今まで早瀬さんのことから目を背けてて。そして…怪我をした）

少しばかり、悔しかった。

そんな辛い過去を、辛い気持ちを自分に相談してくれなかったこ

とが。

そして、

（私はそんなことを、少し気にかけてたぐらいだった）
自分がちゃんと気付いてあげられなかったことが。

「…なあ」

介人が呼び掛けたが、可菜香は返事をしない。
そんな気分ではないのかもしれない。

「ごめんな」

「………」

「怪我させて…」

「…大丈夫」

また会話がしばし途絶える。

しばらくぶりに切り出したのは可菜香だった。

「早瀬さんのこと…いいの？」

「…よくないけど…もう、手遅れなのかもしれない」

「手遅れ？」

「あいつ…なんだか死んでるみたいだった。人の話はまるで聞かないし、無茶苦茶なことは言うし…なんか、全部おかしくなっていたんだ」

蓮は、もう以前の蓮でなくなっていた。その違いは介人だけがわかっていた。

「早瀬は…いつも俺を笑わせてくれた。憂鬱で退屈な日々を…あいつだけが紛らわせてくれたんだ」

「………」

「でも、あの一件から、あいつはもう変わった。俺に執着するようになった…高校受験にも受からず、家出して…あんな風になった。…いや、俺がさせた」

「そうなんだ…」

可菜香は返事に困っていた。それでも介人は構わずに続ける。

「俺が意地を張らずに許してれば、こんなことにはならなかったよな。可菜香も巻き込まれずに済んだし。だから、全部俺のせいだ…。ごめん…」

「……私ね」

私は、謝ってほしいんじゃないかった。

ただ、彼を許してあげたかった。

『君のせいではないよ』と。

「私はね、カイ君に会えてよかったと思ってるよ」

「よかった…？」

「うん…。私、幼稚園を卒園してから、辛かったよ。カイ君がいなかったから…。石橋くんとお姉さんが励ましてくれたけど、やっぱり辛かった。…その…えっ…」

可菜香は口ごもってから、介人にぼそそと言った。

「…ずっと…好きだったから」

「……」

介人の予想は確信へと変えられた。

あの絵本の物語のウサギとお姫様が思い起こされる。

…ウサギ。

…姫。

…俺と、可菜香…。

「あと、こんなことになったのは残念だけど…少なくとも私は…カイ君を許してあげたい」

…可菜香の気持ちはありがたい。しかし、納得は出来ない。

「いや…俺は許されないよ」

すると、可菜香は必死にな様子で力強い声を上げた。

「私は許してあげる…！誰がなんと言おうと…私はっ…！」

一瞬の間が空き、可菜香は告げた。

「私は絶対にあなたを許してあげたいの…！…じゃないと…あなた

はどこかに行っちゃいそうで…!」

「可葉香…」

この時――。

介人の想いは、彼女への感謝で溢れ――。

介人の瞳は、彼女への感謝で潤い――。

カレのココロは。

カノジョへ。

繋がった。

あの日から一週間後に入ったニュース。

『身元不明の女子高生（16）が工場内の工作機械に巻き込まれて死亡しているのを、設備の回収に訪れた作業員が発見、警察に通報しました』

映像には、機械の周辺に血痕が飛び散った跡が映されている。

機械自体には自主規制の布がかけられていた。おそらく、あの中は更におぞましい光景になっているに違いない。

『警察は、女子高生が工場の電源を入れ、工作機械を動かして頭から突っ込んだ自殺ではないかとみて捜査を進めております。なお、女子高生の身元は未だ明らかになっていません』

その後、更に二日後のニュース。

『警察から証言を要求された南東高校の生徒二人の証言によりますと、死亡した女子高生は『早瀬蓮』という名前と、自殺にはその二人が関わっていたことが明らかになりました。警察はまだこれ以上の情報を公開はしていません。また何か情報がわかり次第、追って伝えます』

画面は変わり、先程とは関係のない、火災現場の映像が流れる。

『……次のニュースです、新潟県で——』
テレビはここで消された。

それからおよそ一年後の四月。

介人たちは二年生へ、由奈たちは三年生へと進級した。

今では可菜香と介人の怪我は後遺症も無く完治し、あのニュースのことで介人と可菜香を誰も話題にもしなくなっていた。

みんな普通の生活に戻っていた。そして、今日はクラス分けが発表される。

掲示板の前には小さな人ばかりができ、一喜一憂する生徒たちが掲示板の周りに溜まっていた。

「石橋君、別なクラスになっちゃったね」

「少し残念だな」

「ありがとよ。まあ、お前ら二人が一緒でよかったじゃん」

同じクラスになった三人はそう話し合う。

「……」

介人はぼうっとして天を仰いだ。

あのニュースがあった日からいつも考えてることがあった。

自分は…こんなことでいいのか、と――。

「よーす、二年生諸君♪」

「ういーす、後輩たち」

今では声だけで誰だかわかるようになった。

「あ、おはようございます」

介人が率先して挨拶した。

由奈、真理、沙紀。この三人は以前と全く変わらない様子であった。
た。

「どうかな、お二方。あれから上手くいってるのかなあ？」

それは二日前にも、一週間前にも由奈に尋ねられたことだった。

「いつか私と誠に追い付く日が来るのか…。弟子たちよ、励めよ！」
「いや、何に励めと…」

介人がツツコむと可菜香が横でくすくす笑っていた。

「そーいや、真理といっしーはまだ燻ってんの？」

「……」

「……」

沙紀が聞くが、二人は顔を合わせない。

「あら、地雷？」

「…あのね、亮君、全然はつきりしてくれないの。私が何かしてあげたいのに、いつもはぐらかすし…」

「…あのですね、塚原先輩、気を回し過ぎだと思っんですよ。なんか、優し過ぎて俺…なんか、その……」

「ほら、またそうやって…」

「いや、だって…」

二人はいっしょか痴話喧嘩を始めてしまった。

「…ねえ、私のせいっすかね？」

沙紀が介人に尋ねた。介人は、「さあ…」と首を傾げるだけだ。
どうやら、あの二人はまだ時間がかかりそうだ。

「で？ 介人、大丈夫？ あんなことになって。今更だけどね」

由奈が聞いたことも、周りから散々言われたことだった。

「…大丈夫です。今はなんとか」

一瞬ちらりと可菜香を見る。彼女はそれに気付くと顔を少し赤くして目を反らした。

「…そっか。悪いね、何度も聞いてさ」

「いえ…」

由奈には事の顛末を話してあった。

去年から相変わらず、由奈は介人の「良い姉」のような立場にいた。
た。

「ほら、そろそろ始業式始まるよ。体育館行こっ。じゃ、私たちは先に行くね」

由奈たちは介人と可菜香を残して式に向かった。
また姉は妙な気を遣ったのだろうか…。

「……」

みんな幸せそうだ。新学期を迎えて。

（それに比べて俺は…人を辛い目に遭わせるばかりで）

「や・し・ま・君♪」

「うおおっ!？」

うなじを後ろから指でなぞられ、介人はのけ反った。

沙紀かと思って振り返ると、亜矢と双子たちがいた。

「お姉さん!？いつ来てたの？」

「今来たのよ。で、ちょっとぼけっとしてた谷嶋君に喝をね」

うなじなぞるのが喝かどうかはさておき、介人は苦笑した。

まったく、落ち込む暇もない、と。

笑っていたら、石橋家の二組の双子たちが寄ってきた。

「進級おめでとー、アニキ」

「…おめでとうございます」

浩二と健二。

「おめでとー」

「カナお姉ちゃんも」

佳代と佐代。

「浩二と佳代もね。明日、小学校の入学式なの」

「そうなんですか」

「おめでとう、こーちゃん、かよちゃん」

可菜香は二人のことを普段からそう呼んでいた。

「でも、ちょっと遅いんですね。この地域だと毎年このぐらいなんですか？」

「さあ？知らないわね。他の地域の情報までは持ってないし。じゃあ、挨拶も終わったことだし、明日の準備もあるから帰るわね。じゃ」

「さよならー」

「じゃ〜」

軽く手を一振りし、弟たちと手を繋いで校門へ向かった。

「…あつという間に帰ってったな」

「忙しいからね」

…また考えてしまう。

こんなにみんな幸せな気分なのに、俺だけは気分がきちんと晴れないままだった。

早瀬は仕方なく俺を裏切った。

早瀬は俺に謝った。

俺は早瀬を許さなかった。

そんな俺が原因であんなことになった。

悔やんでも悔やみきれない。

くだいようだが、俺はどうしても幸せな気分にはなれない。

ただ、一つだけ救われたことがある。

「カイ君」

「ん？」

「前にも言ったけど、私はカイ君のこと、許してあげるから。たとえ誰も許さなくても、私だけは…」

そうだ。大好きな女の子からの、この言葉を聞いているからこそ、俺は大切な友達を信じていられる。

「…わかってるよ」

もう、『裏切り』という言葉は、俺の中から消滅した。

「そういやさ、俺、昔のこと少しだけ思い出したよ」

「え、ホントに？」

今はただ、『心の友達』の笑顔を失わないように、幸せに生きていきたい。

「カナちゃん、だったっけ？確かそう呼んでたよな」

「…うん！」

それが、俺の全てだ。

最終話：Heart Friend（後書き）

…はい。

というわけで、終わりました。

Heart Friend。

いかがでしたか？…というのが一番聞きたいことなのですが、今回は短く語るだけで終わりにしましょう。

…何を言ったらいいのか、わからないので（笑）

今回のこの長い話、別に何かの話を参考にしたわけでも、実体験でもありません。悪く言えばただの妄想ですね。

ただ、「こんな物語だったらいいな」という妄想なら完成品は素敵な物になるのではないか。

そう思って書き続けてました。高校生時代から書いてますが、どうにも上手くスラスラいかないものです。始めはともかく、後半から今までは二ヶ月に一話という遅さに低下してしまいました。（単純に遊んでたのもあるのですが…）

でも、これに懲りず、マイペースでまた新しい作品を書こうと思います。アイディアはいくらでもあるのですが、練りきれてないものばかり溜まってるので。

今度は、大好きな系統であるロボット物を書きたいです。

上手く行かないようであれば、非日常を入れた学園物を。

さて、つまらない文に長い間お付き合いありがとうございました。最後に一つだけ述べさせて頂きます。

「友達は、心に必要不可欠な存在です」

それでは、またいつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778c/>

Heart Friend

2010年10月8日13時12分発行